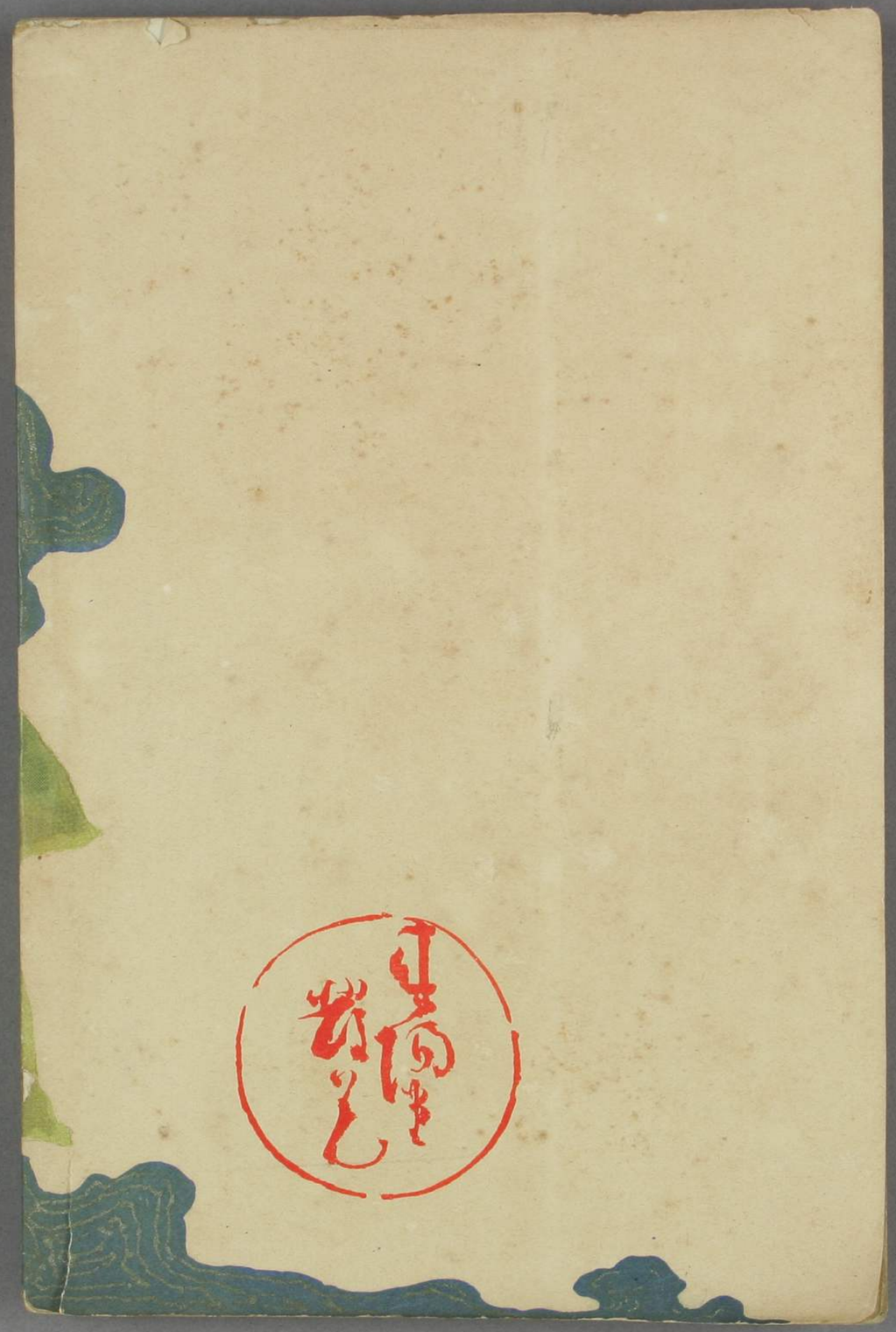
一葉舟

藤村著
不折畫



藤村著

不折画

東京

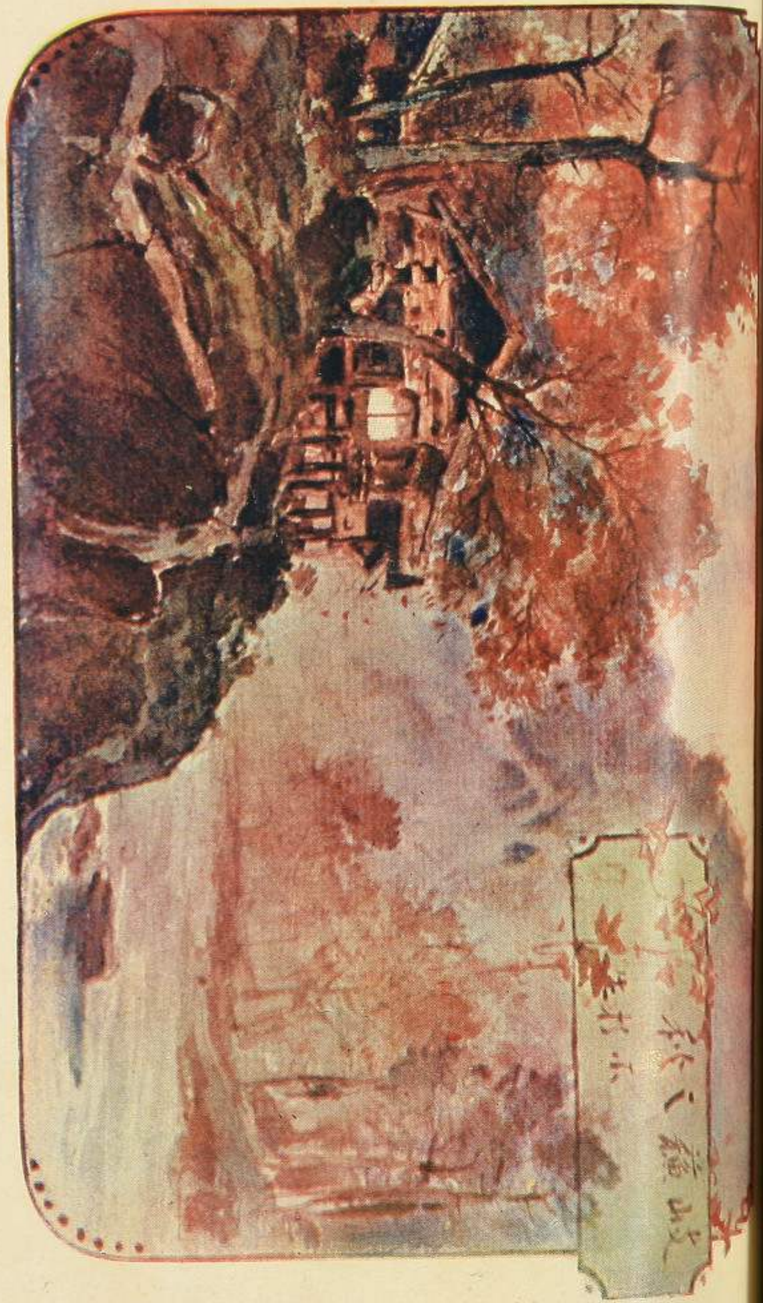
春陽堂發行

ひとは舟

藤村清
不折畫

序

この小册子は過ぐる五ヶせの間、目に見、耳に聽き、心に浮びたることゞもを記しつけたるふみのうちより、とり集めたるものなれば、吾が幼稚なる生涯の旅日記ともいふべきなり。都を離れて遠く山水の間にあそび、さみしき燈火の影にものしたる紀行あり、また新しき友に逢ひて感來り興發するがまゝに書きちらしたる一夕の饒舌あり。されば痴態必ずしも覆はず、性癖必ずしも隱さず。かの頑



是なき小兒が一葉の舟を水の流れに浮べて、遊び戯るゝに等しければ、こゝりてこのふみに名くるこゝ【はなしぬ。

藤村

目次

おちば
春やいづこよ……一
鷲の歌……三
銀河……九
白磁花瓶賦……十三
きりぐす……二十五

ながれみづ……二十九
松島だより……四十五
葡萄の樹のかげ……五十五
春詞……七十三
秋詞……八十五
哀縁……九十三
亡友反古帖……百十五
友に寄するの書……百三十五
西花餘香……百五十一
木曾谿日記……

落葉

一葉舟

島崎藤村著

春やいづこに

かすみのかげにもえいでし
いとの柳にくらぶれば
いまは小暗き木下闇
あゝ一時の

春やいづこに

色をほこりしあさみどり
わかきむかしもありけるを
今はしげれる夏の草
あゝ一時の
春やいづこに

梅も櫻もかはりはて
枝は緑の酒のこと
醉ふてくづるゝ夏の夢
あゝ一時の
春やいづこに

鷲の歌

みるめの草は青くして海の潮の香にゝほひ
流れ藻の葉はむすぼれて蜑の小舟にこがるゝも
あしたゆふべのさだめなき大龍神の見る夢の
闇きあらしに驚けば海原とくもかはりつゝ

とくたちかへれ夏波に友よびかはす濱千鳥
もしほやく火はきえはてゝ岩にひそめるかもめどり
蜑は笘やに舟は磯いそうちよする波ぎはの
削りて高き巖角に去ばし身をよす二羽の鷲

いかづちの火の岩に落ち波間に落ちて消ゆるまも
寝みだれ髪か黒雲の風にふかれつそらに飛び
葡萄の酒の濃紫いろこそ似たれ荒波の
波のみだれて狂ひよるひゞきの高くすさまじや

翼の骨をそばだてゝすがたをつゝむ若鷲の
身は覆羽やさごろもや腋羽のうちにかくせども
見よ老鷲はそこ白く赤すじたてる大爪に
岩をつかみて中高き頭静かにながめけり

げに白髪のものゝふの劒の霜を拂ふごと
唐藍の花ますらをのかの青雲を慕ふごと
黄葉の影に啼く鹿の谷間の水に喘ぐごと

眼鋭く老鷲は雲の行くへをのぞむかな

わが若鷲はうちひそみわが老鷲はさちあがり
小河に映る明星の澄めるに似たる眼して
黒雲の行く大空のかなたにむかひうめきしが
いづれこゝろのおくれたり高く烈しとさだむべき

わが若鷲は琴柱尾や胸に文なす鷄の斑の
承毛は白く柔和に谷の落し羽飛ぶときも
湧きて流るゝ眞清水の水に翼をうちひたし
このめる蔭は行く春のなごりにさける花躑躅

わが老鷲は肩剛く胸腹廣く溢れいで

烈しき風をうち凌ぐ羽は著くもあらはれて
藤の花かも胸の斑の髀に甲ををくごとく
鳥の命の戰ひに翼にかゝる老の霜

げにいかめしきものゝふの盾にもいづれ翼をば
張りひろげたる老鷲のふたゝびみたび羽ばたきて
踊れる胸は海潮の湧きつ流れつ鳴るごとく
力あふれて空高く舞ひたちあがるすがたかな

黒岩茸の岩ばなに生ふにも似るか若鷲の
巖角深く身をよせて飛ぶ老鷲をうかゞふに
紋は花菱舞ひ扇ひらめきかへる疾風の
わが老鷲を吹くさなは一葉を振るに似たりけり

たゝかふためにうまれては羽を劒の老鷲の
うたんかたんと小休なき熱き胸より吹く氣息は
色くれなゐの火炎かもげに悲痛の湧き上り
勁き翼をひるがへしかの天雲を凌ぎけり

光を慕ふ身なれども命運かなしや老烏の
一こゑ深き苦悶のおとをみそらに殘しをき
金絲の縫の黑繻子の帶かとぞ見る黑雲の
羽袖のうちにつゝまれて姿はいつか消えにけり

あゝさだめなき大空のけしきのとくもかはりゆき
闇きあらしのおさまりて光にかへる海原や
細くかゝれる彩雲はゆかりの色の濃紫

薄紫のうつろひに樂しき園となりけらし、

命を岩につなぎては細くも糸をかけとめて
腋羽につゝむ頭をばうちもたげたる若鷲の
鈎にも似たる爪先の雨にぬれたる岩ばなに
かたくつきたる一つ羽はそれも名殘か老鷲の

霜ふりかゝる老鷲の一羽をくはへ眺むれば
夏の光にてらされて岩根にひゞく高潮の
碎けて深き海原の巖角に立つ若鷲は
日影にうつる雲さして行くへもしれず飛ぶやかあたへ

銀河

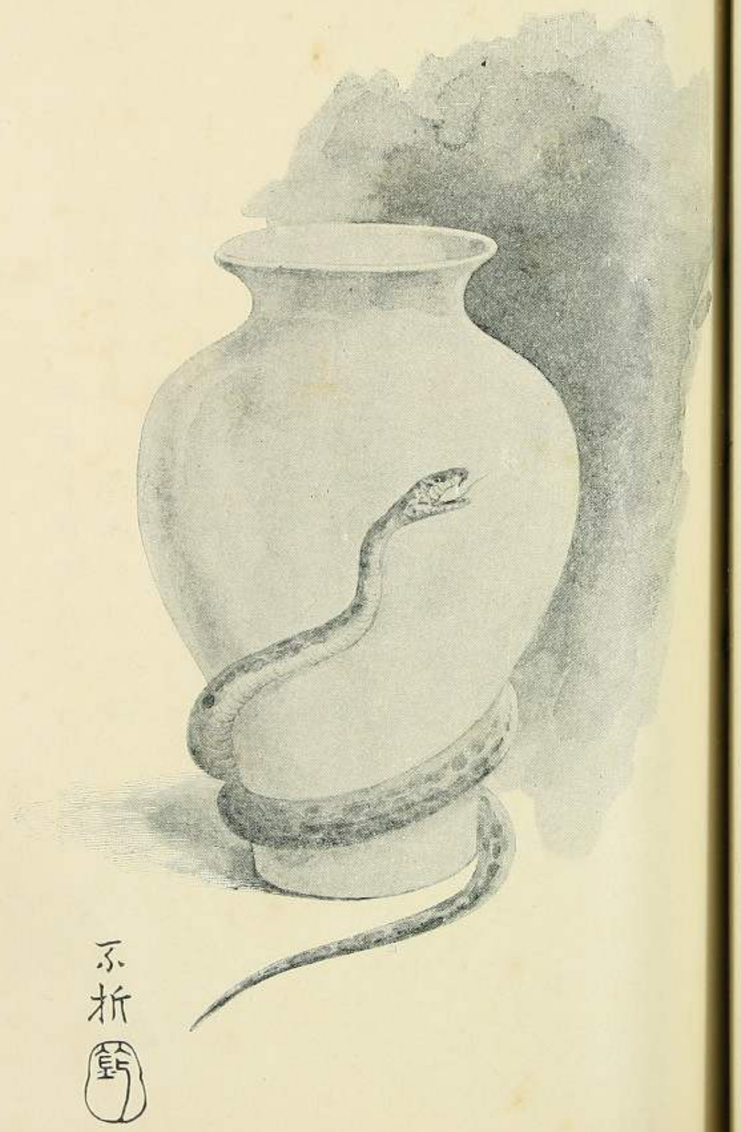
天の河原を
星の力は　ながむれば
遠きむかしの　おとろへて
ゆめのあと

こゝにちとせを
すぎにけり

そらの泉を
よのひとの
汲むにまかせて
わきいでし
天の河原は
かれはてゝ
水はいづこに
うせつらむ
ひゞきをあげよ

織姫よ
みどりの空は
かはらねど
ほしのやどりの
今ははた
いづこゑ櫻の
音をきかむ

あゝひこぼしも
織姫も
今はむなしく
老い朽ちて
夏のゆふべを



かたるべき
みそらに若き
星もなし

白磁花瓶賦

みしやみぎはの白あやめ
はなよりしろき花瓶を
いかなるひとのたくみより
うまれいでしと云るやきみ
瓶のすがたのやさしきは
根ざしも清ぎ泉より
にはひいでたる云ろたへの
こゝろのはなと君やみん

さばかり清きたくみぞと
いひたるふこそうれしけれ
うらみわびつるわが友の
うきなみだよりいでこしを

ゆめにたはふれ夢に酔ひ
さむるときなきわが友の
名殘は白き花瓶に
あつきなみだのこるかな

にごりをいでゝさくはなに
にほひありとなあやしみそ
光は高き花瓶に

戀の嫉妬もあるものを

命運をよそにかげろふの
きゆるためしぞなきといへ
あまりに薄き縁こそ
友のこのよのいのちなれ

やがてさかへんゆくすへの
ひかりも待たで夏の夜の
短かき夢は燭火の
花と散りゆくはかなさや

つゆもまだひぬみどりばの

去げきこずゑのしたかげに
ほと〻ぎすなく夏のひの
もろ葉がくれの青梅も

夏の光のかゞやきて
さつきの雨のはれわたり
黄金いろづく梅が枝に
たのしきときやあるべきを

胸の青葉のうらわかみ
朝露しげきこずゑより
落ちてくやしき青梅の
實のひとつなる花瓶よ

いのちは薄き蟬の羽の
ひとへごろもうらもなく
はじめて友の戀歌を
花影にきてうたふとき

緑のいろの夏草の
ゐしたの露にぬるゝごと
深くすゞしきまなこには
戀の雫のうるほひき

影を映してさく花の
流るゝ水を慕ふごと
なさけをふくむ口唇に

からくれなゐの色を見き

をとめごゝろを眞珠の
藏とは友の見てしかど
寶の胸をひらくべき
戀の鍵だになかりしか

いとけなきかなひとのよに
智惠ありがほの戀なれど
をとめごゝろのはかなさは
友の得しらぬ外なりき
あひみてのちはとこしへの

わかれとなりし世のなごり
かなしきゆめと思ひしを
われや忘れし夏の夜半

月はいでけり夏の夜の
青葉の蔭にさし添ひて
あふげば胸に忍び入る
ひかりのいろのさやけさや

ゆめにゆめ見るこゝちして
ふたりの膝をうち照らす
月の光にさそはれつ
去づかに友のうたふうた

たれにかたらむ
わがこゝろ
たれにかつげむ
このおもひ

わかきいのちの
あさぼらけ
こゝろのはるの
たのしみよ

なぞいたましき
かなしみの
ゆめとはかはり

はてつらむ

こひはにはへる
むらさきの
さきてちりぬる
はなおるを

あゝかひなしや
そのはなの
ゆかしかるべき
かをかげは

わがくれなゐの

かばばせに
とゞめもあへぬ
なみだかな

くさふみわくる
こひつじよ
なれものずへに
なよふみか

さよひやすき
たびゞとよ
なあやまりそ
ゆくみちを

龍を刻みし宮柱
ふとき心はありながら
薄き命のはたとせの
名殘は白き瓶ひとつ

たをらるべきをいのちにて
はなさくとにはあらねども
朝露おもきひとえだに
うれひをふくむ花瓶や

あゝあゝ清き白雪は
つもりもあへず消ゆるごと
なつかしかりし友の身は

われをのこしてうせにけり

せめては白き花瓶よ
消えにしあとの野の花の
色にもいでよわが友の
いのちの春の雪の名殘を

きりぐす

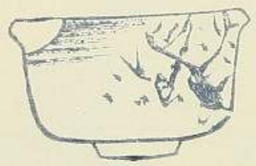
去年(こぞ)蔦の葉のかげにきて
うたひいでしにくらぶれば
ことしも同じ去らべもて

かはるふしなき
きりぐ〜す

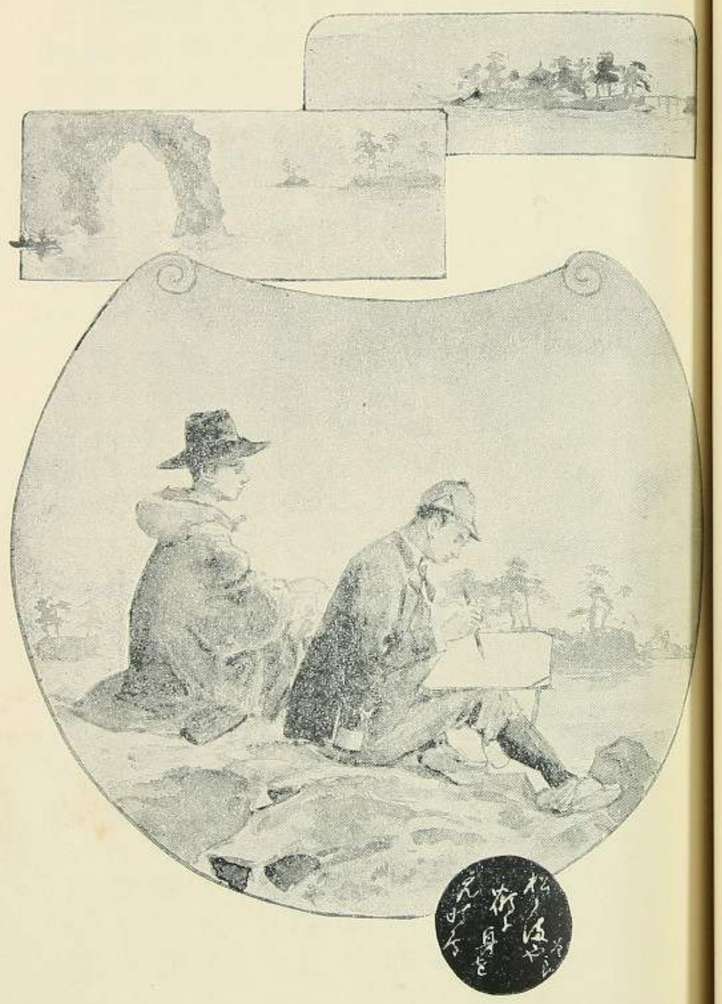
耳なきわれをとがめそよ
うれしきものとおもひしを
自然のうたのかくまでに
舊き去らべとなりけるか
同じしらべに

たえかねて
草と草との花を分け
聲あるかたにたちよりて
虫のこたへをもとめけり

花をへだてゝきみがため
聞くにまかせてうたへども
うたのこゝろの



かよわねば
せなかあはせの
きりぐす



松島だより

わが松島に入りしは九月十九日にして舊暦八月の十三日にあたれり。十三夜の月を心あてにして、仙臺を發し鹽釜に向ひしころは、東天ほのかに白うして加ふるに覺束なき雲行なりければ、滊車の窓より鷄鳴を聞きて、かのさよの中山の馬上ならねど、殘夢未さめやらずして鹽釜に下りぬ。

さだめなきものは天の眺めともいふべきかな。紅雲細く長く東天に浮びて何となく曇り勝なりし空合も、かなたの低き雲は朝風にさそはれこなたの高き雲は不忘山の方に遁れ去り、一つの雲は林にうもれ、一つの雲は海に向ひ、忽ちよして自

然の變化、望みあり心地よき朝のありさまとはなりぬ。まだ船出には暫時の間ありと聞きて松島全圖を購ひ、地理を聞き名勝を尋ねて、朝鳥の鳴く音にゆふべの疲勞を思ふにつけても、われは小兒の時よりあやしきまで美はしきものを慕ひ狂ふの心あり。吾が目は繪畫を味ふに足らざれど畫といふ畫筆といふ筆、青色紅色紫色黄色濃淡光彩の自然に發するを見るごとに吾心は惑ひ吾目は眩する迄にも忘れ難きの思ひをなせり。吾耳は音樂を聞くに足らざれども調といひ韻といひ聲律の吾身に觸るゝを覺ゆるときに、自ら忘れ自ら失ふほどに捨て難く離れ難きの思ひあるなり。われは自然の美なるを愛す、不朽の畫、不朽の聲、これらのものは松島の天と水とを通して將に吾眼前に開けんとするを思へば、胸躍り心醉へるが如くなるうちに、船は出でぬ。

同行の池雪君は仙臺の人にして畫工なり。寫生の用意を整へなどし松島はもとより案内知りたれば立ちて岸邊の風景を數へなどするうち、われに語りていふ、松島に來り失望して歸るもの多し、其名の其實に添はざるが如き思ひをなせるあり、其境の廣くして其景の淺きに似たるを怪しみ多く風光の變化萬狀を捉るに暇あらずして、一日の遊、一夕の觀、以て松島を罵り去らんとするものあり、これ日本三景の第一勝、これ自然の大觀なりと言はれて茫然として異樣の感をなせるもの多きなりと。さもあらん、さもあらばあれ、自然をして人間の不滿足を笑はしめよ。

東北の地勢は廣濶なる原野なり。山嶽の偉大なるもの相比肩して互に馳せ互に沒するは中國の奇葩、東北の山脈は玄から す、寧ろ廣大なる丘陵の原野を走るが如き觀をなせり。山も

とより少なからず、去かも變幻出沒して雲表に豪然たる偉容を作れるは少なし。中國の山は立てり、東北の山は横はれり。紫苑の花萩の花女郎花もしくは秋草野花をもてかざりとなせる宮城野の一望千里雲烟の間に限り無きが如きは、獨り東北の地勢にして中國に見るべからざるの廣野なり。この地勢に作られこの原野にさそはれて、吾國第一勝の松島は成れり。其風光の中國の名勝と大に趣を殊にするは自然の勢といふべし。されば松島の眺めの海には淺く、湖には大に、海水を以て滿さるゝ廣野とも言はゞ言ふべきは蓋し是が爲なるべし。名にしおふ松島は今や開けてわれらの前にあり。驚くべきかな自然の無盡藏。人の秘密を搜るに任せて猶千古の色を改めざるものは實に自然の無盡藏なり。古來幾多の大詩人をして擅に其隱秘を握らしめたるにもかゝはらず猶常に新しき密藏

を漏してわれらが如き旅客にまで私語するものはかの自然なり。

小舟を僦ひて鹽釜を發せしは諸島の間を拔けて元松島に達するの便によれり。客商賣にてありながら相應に舟賃を貪ることを知りて茶を賣ることすら忘るゝ如きは、さすがに處柄なりと池雪の戲るゝうち、小舟は友とわれと二人の親子らしき乘合の田舍客とを乘て、小松崎姥崎藤島崎などを昔の歌の島隱れ、辨天島のあたりを漕ぎ行く頃は雲霧また來り集り、海靜かにして空曇る。かの青春妙齡なる美術狂が始めて畫堂に上りし時の如く、いづれか心を引き神を醉はしめざるはなく、希望の來ること海潮の音の如くにして自己また大なる光輝に包まれて來りしが如くに思はるゝ時と同じく、かしこには都島かしこには材木島、兎島、太皷島、皷島と數へ來る頃は、

朝日少しく顯れ長雲細雲相往來し、諸島の其間に出沒するを見ては誰か自然の廣大にして美妙なるに心醉せざるものあらん。あゝ急激なる美術狂の漸く畫堂に慣れんとするや、忽ち不平不遽の大塊と成り了るが如くに、後に至りて彼の島も奇ならず、是の島も妙ならず、傲然笑ひ去り罵り來り遂に松島もこれ平々凡々の境に過ぎざるのみと、頗る怪しき不平家と成り了らんとは、誰か始めて舟を都島のほとりに浮べしもの

の思ひ設くるところならんや。

このあたり舟に乘りて出で舟に乘りて歸へるとき、朝と暮との眺めありて、朝は島々を黑く見、暮は島々を白く見るとの船頭の言葉によれば、舟は東をさして行く故に島は光を背にして暗きは朝島、日西に入りて光の返るときには島は夕影を東に投げて明るきは夕島、今は島々の濃く薄く、あるひは黑く、あるひは淡く、一氣になぐりしかと思はるゝ墨の色もあれば、青葡萄の色の薄紫を染め合せて澄透なる色彩を發せるが如くに見ゆるもあり、青く光りて見ゆるあり、淡くして灰色を成せるあり、海上は湖の如くなれど葦の湖の如くに沈まず、琵琶湖の如くに澄まず、靜かにして麗しく、暖かにして清く、畫も及ばず筆も及ばず、優和なる自然とは之をいふか、自然の女性とは之を譬ふるか、西行法師も戻り松に戻り、狩野法眼も筆捨松に筆を捨てたまふなるべし。

松島の松は皆女松なり。綠すこしく薄き故遠くより見ればいよ〳〵青くして、鎌倉の男松の遠く見て更に黑きと趣きを異にせり。われは常に松の無用にして、祝賀の席に飾られ炊煙の材に切られ、紫檀黑檀の美もなさず櫻の花の散り易く其樹の枯れ易きが如くにもあらず、莊子所謂無用なるが故に大な

るが如きを笑ひしことありしが、一樹一樹の眺め、一枝一枝の姿ある松島の松を見ては、千樹萬樹悉く非凡なる刀痕を印して、岩上岩底に蟠る松根の長龍、いづれか旅客の心を奪はざるはなし。大平洋のかたに向ひて沖二子島は雲烟の間に現出し、后島は優しく化粧島は美はし、かの島は婆々が鐘打つ念佛島、この島は親に勘當裸島なぞゝ、教師を兼ねたる船頭の興に乘じて種蒔かずともなぞ唄ふを聞けば、客は皆興に入りてかの島よりこの島、舊き島より新しき島、一つを見ては一つを忘れ、彼を眺めては是にうつり、舟漸く早くして雲の眺め、島の姿忽ち變じ忽ち動き、見る人の心も亦忽ちにして變り行くめり。

舟は行くこと速なれども海面靜なること鏡の如くなれば、池雪しきりに鉛筆を取りて寫生をなすも妨げとなることなし。

松は緑に岩黄なる『だいり島』の影を行くとき、池雪が瞬間に一葉の畫を作りしを見て、生れ得たる天分とは言ひながら嗚呼羨むべきものは繪畫の力なりと思ふにつけても、かくまで變じ易くかくまで捉へ難き、かの自然を寫すはまた難からずや。秋草秋花、白露の消易きをいかにせん。紅雲彩虹、流水の歸り難きをいかにせん。一島一松、其色を睨み其影を捉へんとする間に自然は逸早く逃遁して去るなり。かの岩の角、この松の枝、一局、一部、これわれらの筆にも語り文にも綴り得べき處なれども、活きたる松島と動ける自然とはまことに一天才の筆を借らずんば寫し得ざるところなり。眞に松島を觀んと思はゞ共に手を携へて天才の明鏡に行かん。

われ曾て琵琶湖に浮びしとき湖水頗る透明なるを感せしが、松島の海上はさまでに透明ならず、湖水潮水の別あるのみな

らず彼湖心の砂石にして是海底の暗泥なるが爲なるべきか。池雪試みに櫂をとりて水淺き處にさし入るゝに、櫂より垂る水滴の海面に落ちて、靜鏡秋露を散ずるのありさま、滴々として珠數とも見まほしき依樣を畫けり。秋の日のひかり花やかにさして波押し分けて進む舟路は明かに長き尾を印し、清波の反射は恰も輝めく梭の如くに見たり。鐙島、甲冑島、鞍掛島、兜島のほとりを過ぐるに、忽ち隱れ忽ち顯はるゝ島々の近き綠、遠きは紫、更に遙かなるは青くして、海底さまでに暗からず、潮水決して冷たからず、深く青き海の水のうちに海草の葉の浮び流れて、あり〳〵と透き見ゆるなど、げに今を通して古をうかゞふ詩仙の歌をよみたらんがごとき心地もせられしなり。境はこれ山水の粹の粹、天は仲秋の清の清、われ今松島にありて天の樂園を想像するに、舟は小なれ

ども誓の船かとも見ゆ、水は澄みたれば法の海かとも思ふ。あゝわれ既に死して船に乘りて天の樂園に優遊するかと疑はるゝもおかしく、島上の青松は皆な七重の行樹か、海潮はこれ八功の德水か、白光赤光の蓮の花こそなけれ、澄き見ゆる水底の岩は皆な黃金なるべし、かの水鳥の鳴く音には白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵、頻伽、共命の聲々も通ひぬべく覺ゆ。赤き顏の船頭も水を司るの神かと疑はれ、古き山高帽子に白足袋はきて藥籠の煙草入さしたる田舍の客も共に阿閦牌、須彌相の諸佛かとも見まがふ、あゝ紅顏の池雪君はわがベアトリチエなり。われかゝる諸神に伴はれて一葉の舟に乘て不朽に流るゝが如くに想像せしが、あやまてるかな、執着の卑く機根の下なることわれがごときもの、いかでか樂園を願ふべけんやなど、かゝる想像に耽りて松島村の岸邊に着か

んとするをも心付かず、池雪に驚かされて其指す方を見れば、水の上二三尺ほども離れて、渡り行く一つの羽白き小蝶あり き。

さびしさは自然にありといへど、爰には其寂しさも感ぜず、自然の豊満なぞいふことを考へて、雄島を横に松島村に到りしは午前十一時頃なりき。こよひはこゝに一泊の心算なれば、宿を求めて晝餐に海魚を命じ、やがて宿を出でゝ池雪と共に五大堂に趣けり。五大堂のほとりに、

日はくれぬ日はなけれども秋の暮　枇杷園

枇杷園のあるじ朱樹子朗翁は尾張の醫にて俳壇に著名なる古人と聞けり。碑の石に腰かけて道行く人を見るに、列をなして歩む學校生徒あり、若き男の句にても案じ顔に彷徨してあるが、ふと目につき、これも若くして早く運命の鳴門に捲き

込まれたるらしき一人と思へば、そゞろに今の世のあやしく、憐れなる少年よ、盛なる時に遇はずして誰か人の世の歡樂を味ひ知らんや。意氣揚らず、精神昂がらず、大なる樂みもあらず、ましてや大なる悲哀もなし。音曲の一通りも心得ず、歌舞の一手も辨へず、若きものゝ相集り相樂むことすら少なきほどの世に、誰かは才眠り智衰へ望落ち愛泣かざらん。世を飾り國を飾るは言はずもあれ、市を飾る花の祭さへさびれ行ては人の衣裳の花も腿せたり。かく馬鹿々々しきことを思つゞけて、更に轉じて觀瀾亭に到れば、こゝは月見崎のかたに立て月明の夜ことに佳なりといへり。觀瀾亭より迂徊して吐月橋を渡る。

踏み分けてわたりもやらず紫の
藤さきかへる松島の橋

渡れば雄島なり。萩の花さきこぼれて秋の色を示すがうちにも、海に臨みて立てる禪堂妙覺菴は水に映じ、松樹の影に詩歌俳句の彫刻せられしもの頗る多し。いづれの石を見ても松島の勝を賛美せざるはなきうちに、かの名高き句をも見出しぬ、

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

彼は信濃諏訪の人、奥の細道などにて殊に世に知られたり。この詩歌俳諧の墓地ともいふべき處より、更に海に向ひて座禪窟あり、其數百三十と聞こゆ。伊達家の菩提寺なる瑞巌寺をも見、富山はこゝより遠からずと聞きて更に其勝を探らんと思ふうち、雄島の松の影長くして日の暮るゝを示しければ果さず。

こよひの月こそはと客舍の樓上にありて池雪は畫を案じ、わ

れは欄干に倚る。松島の美は天の美と水の美なり。散布せる諸島は松と岩とを載せたる舟の如きなり。かく迄も廣く麗しき自然の、天の力をかりて朝暮に變化するを見るときは、自然に恐怖し自然を驚嘆するの心反て減少し、之と親しみ、之を樂しみ、反て自然と遊ばんと欲するの心を生ぜしむ。是れ境によりて情を生じ情によりて境を思ふが爲ならん。かく考へなぞするうちに日暮れはてゝ空曇り、海さみしくして島隱れたり。あゝあゝこの闇夜をいかんせんや。月なくては又何の樂みなきのみか、雷鳴人を襲ひて物悲しく、池雪は老いたる祖母の上なぞ案ずるうち、あまり電光のものすさまじさに、欄干によりて松島の闇をうかゞへば電影飛閃して忽ち明るく忽ち暗く、青く白き光の影に島々の黑く見ゆたりしは歌にも詩にも少なき凄凉なる思ひを與へたりき。

昨宵の月はあかくさし入りて燈火も用なき程に照せりといふものを、月光無情、むなしく遊子をして心を愁ひ家を思はしむ。せめて翌る朝は日出の大觀に接し、驚くべき天景の色彩燎爛たるを觀、かの樂園などに於て始めて想像し得るごとき曉景を目のあたりに見んものと、心いさみ立ちて其夜は雷鳴のはげしさも忘れて夢に入りしが、きのふの勞れ多かりしより池雪はわれと共に目ざめしころ、日光既に室に滿ちさり、互に顏見合せ相苦笑して再遊を約して歸途に就きぬ。

葡萄の樹の蔭

筆を揮へば花となり雲となる畫工の力の美ましさよ。若し吾に明暗を寫すの筆、色彩を施すの力だにあらば、吾心に想像するが如くに畫かんと願ひわづろふものあり。吾は畫工にあらねば運筆の法、着色の工合をも知らねど、幾度かかゝる想像に導かれて心に畫けるものを寫さんと思ひ、畫きては消し消しては畫き、遂に何の味ひもなく面白くもなき反古を費せしも幾枚か。畫かぬ先にすら斯るうるはしき繪畫と思はるゝものを、畫かばいかに吾心に協ひ、いかに筆力の活動し、いかに美妙なる色彩を發つらんと、嗚呼かゝる賴みの外れざる

ためしは稀なり。

慕はしきかな葡萄の樹の蔭。かりそめに吾が拙劣なる畫題を設くれば葡萄の樹の蔭と言はまほしきなり。吾が畫きたる葡萄の房は黑色を帶びて山葡萄の腐敗せるが如くに思はるれどまことの房はかゝる艶もなく命なきものにはあらず。青きが上に薄く染められし紫の色やさしく夕立の露を帶びて葡萄棚の上に懸れり。吾が畫きたる葡萄の葉は少しく大に過ぎて梧桐の葉とも見まがふばかりなれど、吾が爲に樂しき蔭を作れるまことの葡萄の葉は更に柔かく、新しく、美はしきものなり。懼るべき舌を有せる親友にかゝる拙なき繪畫を示さば、畫くは畫かぬに勝れりとや嘲らむ。されど夏の日熱く花やかにさし入りて葡萄の樹の蔭に遊ぶ時は、西風靜かに極樂より吹くが如く、葉越しに透き見ゆる青空を行く白雲黑雲の流轉も心

を驚かし、渴ける時には汲めども汲めども涌き出づる清泉を掬びて限りなく新しき思ひを樂む。夕ざれば星のひかりの樂しきあり。落つる日の悲しきあり。吾は時として自然の心を疑はざるにあらず。葡萄の樹の蔭はいかに樂しと雖も、吾は自然に欺かるゝに非ずやと思へることあり。嗚呼あやまれり吾を生める老母は吾が爲に心を傷め、吾が爲に涙を流し、晝夜吾を慕ふて忘るゝ暇なし。母にしてかくの如し。自然何ぞ人を欺かんや。自然何ぞかく冷やかなるものならんや。枕を叩いて長き夜を泣き明したる者にあらざれば、涙を呑みて「パン」を食ひしものにあらざれば、音樂の深味を知る能はずといへり。渴ける者にあれども伯牙は常にあらず。富士の高や。美妙なる琴は常にあれども赤人は常にあらず。まことに枕を叩いて長嶺は常にあれども赤人は常にあらず。

き夜を泣き明したる者にあらざれば、涙を呑みて「パン」を食ひしものにあらざれば、將又自然の深味を知る能はざるべし。自然を研究するは詩人が一生の重荷なり、又希望なり。自然なる言葉の中よと幾多の意義ありて、人間以外のものといふ廣き心に用ゐらるゝ時あれば、或は造化萬有なる深き心にて用ゐらるゝ時あり。隨て之が研究にも幾多の方法ありて、古來の詩人が自然に對するや個々殆んど別途を歩むものゝ如く、凡ての詩人は各其自然を有せるかの觀あらしむ。是に於て始めて自然は無盡藏なり、將又味ひありと言ふべきなり。燥狂にして觀ずるあり。靜澄にして達するあり。或は性急狂癖にして電光の如くに自然の懷裡にひらめき入り、言ふべからざる清泉を掬して歸る者あり。或は花の如き心を以て、火の如き情を以て、陶然として醉へるが如くに自然の深泉を酌む者

あり。或は弱肉强食の競爭世界に恐怖して、進んで暗黑なる自然の怒濤に身を投ずるものあり。一たび自然を捨てゝ後始めて自然の拾ふべきに驚きしものあり。自然を研究する心なくしておのづから研究を重ねたる者あり。實界の敗將となりて自然といふ城郭に立籠り、曾て己が實界にありし時の如くに懼るべき劒を振つて自然に戰はんと試みし者あり。想像豐かならざれば趣味深からず、趣味深からざれば洞察明かならず、洞察明かならざれば情熱醇ならず、情熱醇ならざれば自然の最深なる聲を聞く能はず。自然の研究も亦た難いかな。ウォルヅオースの如きは身を自然の裡に投じ、「ライダル」の山頭に靜かなる草の菴を結び、入つては乃ち自然、出でゝは乃ち自然、彼の眼中には自然の外なきなり、彼れが紅塵十丈「ウェストミンスタア」の橋上に佇立せしや、其の感想殆んど

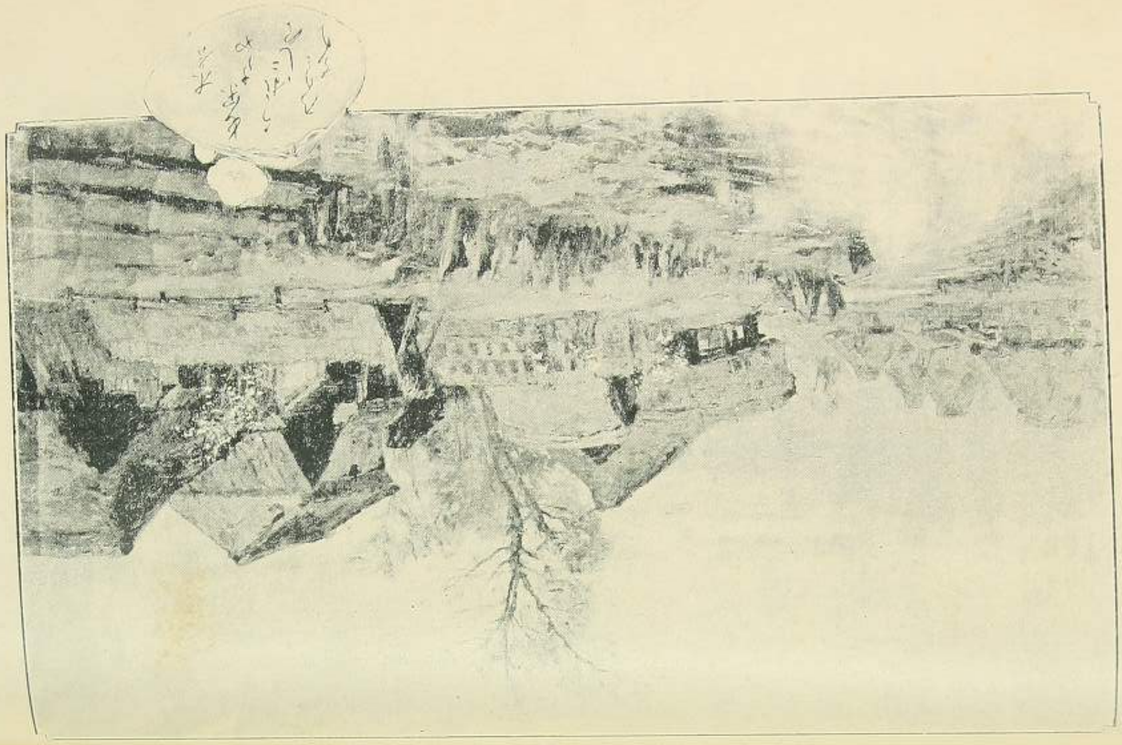
「カンバアランド」の村居にあると大差なかりしなるべし。彼れは斯の如くにして自然に對する殆んど終始一路に出でたり。彼が自然主義は湖處子の十二文豪ありて既に人の熟知するところなり。笑んぞ知らんバイロン等青春なる詩人をして彼が六十年間の沈靜敬虔なる生涯を苦笑せしめんとは。憐むべし白頭翁。ウォルヅォースにして斯の如し。口に自然を唱へ、目に自然を視、耳に自然を聽くとも、猶未だ自然に徹する能はざるものあるか。悲壯亂舞、泣かざれば怒り、怒らざれば笑ふといふ詩人バイロンの舌頭にかゝりし善良なるウォヅルォースこそ氣の毒なれ。然ども心あるものはバイロンを見て徒らに不平不懣にして年長詩人を茶にしたるものとは思はざるべし。自然は是に於て測り知るべからず其の泉は滾々として汲めども盡きせじ。

いかに美はしき衣服と雖も常に之を着すれば、其美はしきを失ふに至る。嘆くなかれ、是に於て新衣を着するの必要あるなり。いかに古人の敎えたまひし妙なる自然と雖も、歲月は之を驅つて無味なる繪畫と化す。悲しむ勿れ、是に於て新しき自然を味ふの心動かんとするなり。自然に聲はあれども新しからざれば吾等に何の深味を敎えず。自然に色はあれども新しからざれば吾等に何の妙趣を與へず。歩を轉じて試みに野外の青草を蹈め。草は舊を辭して新葉を着けんとするに、吾等何ぞ一歩を新しき自然に轉せざるや。夏は來り潮は流れて夕の夢を洗はんとを促す。見よや見よや新しき花あり、新しき星あり、新人となつて新衣を着す、また可ならずや。自然に對する哲學は轉々として變ずと雖も、自然は萬古依然として殘れり。されば萬葉の詩人にして始めて高烈雄大なる

自然の聲を聽き、蕉門の詩人にして始めて幽玄閑寂なる自然の聲を聽きたまひしなり。自然を友とせしといふバアンスにして始めて鼠の歌あり。自然を神とせしといふウォルヅォースにして始めて山家の少女の詩あり。吾等は自然の小兒のみ。されば自然を吾等が母として、其間に優和なる、自然なる、將た又た溫情の溢るゝ思ひを學ばんと願ふ。

書籍を友としてこそかゝる勝手がましき理屈もつくものなれ、葡萄の樹の蔭に彷徨して夕べの空の紫の雲に包まるゝを望む時、嗚呼優和なる自然は人をして心情の淺きを忘れしむ。苦しめる人に空想といふものを許せかし、空想時としては言ふべからざる慰藉を與ふることあり。なやめる人に迷執といふものを許せかし、迷執時としては譬ふべからざる微笑を與ふることあり。悲める人に夢を說くことを許せかし、一夢時

としては千行の苦涙を拭ふことあり。浮世に泥土塵埃あるを許せかし、泥土時としては美妙なる聲を放ち、塵埃時としては不朽の詩神を寓することあり。



春詞

一

かくいへばいかにも幻想めきて、いたずらに影の影に似たることを語るようなれど、われは春に隨ふ九人の童子ありと思ふ。

五色の玉飛び散つて仁となり義となり禮となり智となり信となり、或はまた五戒の魂となつて那智の瀧の水に浮びしとは聞けど、それは儒界佛界の妙なる想像より産み落したる靈兒にして、わがいふ九人の童子とはさせるたぐひに非ず。

ひとゝせのけふのこのごろ、風吹かば花やちるらん、雨ふらば色やあせなんと、きのふはきのふの思ひ、けふはけふの思ひ

にほだされれば、人の心こそあやしけれ、さみしく、つめたく、味氣なく、遣瀬なかりし冬の日のむかしも忘れはてゝ、近くは上野向島遠くは芳野嵐山の花の噂さに、春を樂み春を惜むの思ひのみぞせらるゝ。

春か、春か、目には新しき春の色を觀、耳には新しき春の聲を聽き、口には新しき春の水を飲み、鼻には新しき春の匂ひをかぎて、心に新しき春の思ひなからずや。

刀鑿を持てるは彫刻の童子、繪筆を持てるは繪畫の童子、花の枝を持てるは微笑の童子、扇子を持てるは春風の童子、香爐を持てるは放香の童子、樂器を持てるは奏樂の童子、酒壺を持てるは醉舞の童子、弓矢を持てるは愛情の童子、歌集を持てるは歡樂の童子。

おもしろや彫刻の童子、童子先づ手に持てる刀鑿を振へば、

花には花の蕾を彫み、梢には梢の新芽を彫み、草には草の青葉を彫む。われは先づ彫刻の童子が春を告ぐるのことばを聽かむ。

二

年若き男よ、うるはしき乙女よ、われは春に隨ふ童子の一人なり。願はくはわれらの言葉に耳傾けよ。われらが齡(よはひ)の足らざるを見て、われらを嘲り苦むるなかれ。われら未だ人の心にひそめる琴の音を聽かず、心の底にわだかまれる苦樂を知らずとして、われらの愚かなるを責むるなかれ。凡そ世にかなしきこと多しと雖も、人間の嘲弄ほどわれらが心にかなしきはあらじ。われらが心は弱くして汝が冷笑に堪えず、われらが命はもろくして春の日の花に似たり。われは野に舞へる

かよわき蝶なり。翩々としていたるところに迷ふがごとくなれど、わが羽はいかで汝が針の如き痛罵に堪ゆべけんや。年若き男よ、年若き男よ、われは汝の手にすがりて新しき春を告げんとするに、なんぞ強きこゝろをもてわが言葉に耳傾くるや。うるはしき乙女よ、うるはしき乙女よ、われは汝の耳近く新しき春を告げんとするに、なんぞ弱き心をもてわが聲を聽かざるや。冬は逝けり、冬は逝けり、われは暖き情をもてこの春の心を語らんとするに、汝なんぞ其涙をかくさんとするや。友ありて汝に火のごとく花のごとき友愛の思ひを記し贈るとき、汝手を縮めてこれを避けんとするか。否な否な誰か冷笑の舌をもちて友情の寶珠を嘲るべき。今われらが筆の跡はこゝにあり。この花の蕾はわが彫めるものなり。かの柳の葉はわが彫めるものなり。見よや見よや吾が彫みたる花

の蕾には、こゝに新しき春の形を寫せり。おもしろや、かく語らへる彫刻の童子に次ぎて、繪畫の童子一たび其手に持てる繪筆を振ふときは、一つの花、一の草は言ふも更なり、行く水、空の色に至るまで悉く春の色を染めざるはなし。われは更に繪畫の童子が春を告ぐるのことばを聽かむ。

三

われもまた春に隨ふ童子の一人なり。年若き男よ、うるはしき乙女よ、汝に吾心を告げずして誰にか春を告ぐべきや。空うらゝかに晴れ渡りて、やわらかき風新しきみどりを吹く、あゝ汝、汝はこれをひとゝせのいかなる時と思へるぞや。櫻の花はやさしく、桃の花はおもしろく、百花さき亂て夕べの

星のひかりにうつろふ、あゝ汝、汝はこれをひとゝせのいかなる時と思へるぞや。雨の音しめやかにして、晴るゝかと見れば降り、降るかと見れば晴れ、うぐひすの花の梢に新しき調べを歌ふ、あゝ汝、汝はこれをひとゝせのいかなる時と思へるぞや。汝は夏と答ふるや。葉末に露の玉をむすぶ秋の日と答ふるや。置く霜の冬の日と答ふるや。春よ、春よ、春の花も見ず、春の星も知らず、春の草も履まずして、新らしき花、新らしき星、新しき草を知りつくせりと言ふなかれ。年若き男よ、われは汝と共に手を携へて、わが筆に染めたる柳の樹の影に行き、汝と春の樂みを語らんと思ふなり。うるはしき乙女よ、われは汝と共に手を携へて、わが筆に染めたる春の花の影に行き、汝と共に新らしき春の樂みを語らんと思ふなり。

やさしきは微笑の童子なり、かく繪畫の童子が語るにつけて言ふべからざる微笑をもらせり。一の人童子花の蕾を彫み、一人の童子花の色を染めて、未だ々々花の姿を成さず。童子一番微笑すれば、花は忽ちにして春の心を得たるものゝごとし。われは更に微笑の童子が春を告ぐるの詞を聽かむ。

四

われもまた春に隨ふ童子の一人なり。われを見て何を微笑むやと問ふなかれ。われを見て何の悲みも知らざるものと嘲るなかれ。凡ての夏のかなしみ、凡ての秋のかなしみ、凡ての冬のかなしみ、われはこれらのものを知れるのみならで、また凡ての春のかなしみをも知れり。うるはしき花は永く止まらず、歡樂や、愛情や、また花の如くにして永く止め難し。

いざさらばひとゝせのけふこのごろ、嗚呼々々花の色の深きを待ちて、散らぬまに春の心を味ふべきかな。春は來ぬ、春は來ぬ、年若き男よ、うるはしき乙女よ、汝はわが微笑むを見て、花の影に隱るゝなかれ。汝柳の枝をもて汝の顏を覆ふなかれ。

微笑の童子に次ぎて語り出でたるは春風の童子なり。童子一たび手に持てる扇を動かせば、花鳥をやはらげ、草木をあたため、人の心もまたおのづから浮き立つぞおもしろき。われは更に春風の童子が春を告ぐるの詞を聽かむ。

五

たのしいかな百花のすがた。おもしろいかな流水のこゝろ。そもや天地は逆旅にして光陰は百代の過客なりと言へり。旅

人よ、旅人よ、年若き旅人よ。何ぞ何ぞ汝が途を急がんとするや。なんぞ汝が途を急ぐことを止めて、汝が前に横はれる春の水を飲まざるや。年若き旅人よ、汝なんぞつれなきや、汝の前にさける花は汝に蹈まるゝにあらずや。年若き旅人よ、汝なる春の星は動いて汝を照らすにあらずや。年若き旅人よ、汝なんぞかたくなゝるや。なんぞ心を動かさざるや。汝の後にあることとの早きや。なんぞ今の日に生れて昔の人の如くなるや。嗚呼旅人よ、旅人よ、なんぞ今の花を見ずして昔の花をのみ戀ひ慕ふや。なんぞ昔の夢をのみ思ひわづらふや。なんぞ古き衣を捨てざるや。なんぞ古き家をのみつくらふや。なんぞ破れ草履をぬぎ捨てゝ心地よき清水に汝の足を洗はざるや。なんぞ新しき花を見、新しき草を蹈みて、新しき春を思はざるや。

めづらしや放香の童子、童子は春風の童子が語るを待ちて、手に持てる香爐のけふりを放つに、風もまたしめやかなる匂を送り、花はとこしへの春の香に酔ひて、この世ならざる吐息にむせぶかと疑はる。

六

うれしやな奏樂の童子、童子一たび琴を彈ずるときは、花に啼く鳥の聲おもしろく、梢を漏るゝ春の調べ心地よきこと言ふべからず。童子が琴の音に合せて、あはれにいみじく歌ふその歌、

いづこより來ていづこまで
歸ると問ふぞ情なき

いづこよりと歌ひそめて、歸ると問ふぞこゝろなきのこゝろ

なきといふ言葉に力を入れたり。愛すべきかな童子、目元すずしく、口唇はしまりて紅の花の如く、其手は打震ひ、其胸は踊れり。歌のふしぶしにあはれの籠れるは人の知るべきかなしみも覺えしにや、調は花やかにして艶に過ぎず、聲は澄みてしかも淺からず、歌ふごとに其口唇の震ひ動けるは心に燃ゆるところありと見えたり。この二句の心はいづれより人間の生れきていづこまで歸るものなりやなどゝ尋るは、これ理に落ちたる問にして、未だ情ある人の言葉にあらずといへるなり。

聽きたまはずや吾琴に
汝が故郷の響あり

聽きたまはずやと歌ふを聽くとき吾心は彷彿として春に觸るるの思ひあり。吾琴にと歌ふとき、われは言ふべからざると

ころに誘はるゝかと疑へり。汝が故郷の響ありと歌ふや、花の如き童子の頰には熱き涙の流れ出でぬ。童子が深くして遠き音調をかなづるや、吾心は吾を出でゝ何心なく童子と相抱くかの思ひあり。この二句の心は前の句を受けて、人の生れ來り人の歸り行く故郷の響を聽かずや、吾琴の音こそ其故郷の響なれといへるなり。

音樂には故郷の響あり。われは童子の歌をきゝ、童子の琴の音をきゝて、いよ〳〵故郷の慕はしさを感ず。舟に乘り、車に乘りて、歸るべき里の吾故郷なるのみならで、人間別に歸るべく慕ふべき故郷のなからずとせんや。童子が歌のこゝろは是なり。

酒壺を持てるは醉舞の童子なり。さらぬだに心浮き立ちて、春風春水、一つとして思ひを動かさしめざるはなきに、一た

び童子が盃を受けては、天も花も醉へるがごとく、人もまた多く春に醉へりや。われをして童子が春を告ぐるの言葉を聽かしめよ。

七

われもまた春に隨ふ童子の一人なり、あゝ年若き男よ、うるはしき乙女よ、奏樂の童子がいみじき手ぶりにのみ耳傾けてわが言葉を厭ふなかれ。あゝ汝恐るゝなかれ、汝春を避くるなかれ、わが姿の物狂はしきを見て、われを思ひあやまつなかれ。われを見て世を樂むほどの温きこゝろを知らずと嘲るなかれ。われを見て世を厭ふほどの優しきこゝろを解せずと罵るなかれ。われを見て春を誇るほどの強き心を持てりと思ふなかれ。われは孤兒(みなしこ)の其親を慕ふがごとくに汝を慕ふ。わ

れは若鮎の水上を慕ふがごとくに春を思ひわづらふ。わが心は弱くしていかならん束縛にも堪へず、わが命は短くして花の如く、わが思ひは長くして水の如し。嗚呼汝、年若き男よ、うるわしき乙女よ、汝が命は遂にいくばくぞや。きのふの日は吾を捨てゝまた止まらず、けふの日は吾を止めて憂ひ煩ふこと多し。嗚呼々々けふの春に醉はずして、またいづれの春にか醉ふべきぞや。春、春、春は遂に永く止むべからず。あゝ汝、汝は醉ふて泣かざるや。汝は泣いて醉ふことを欲せざるや。永く、永く止むべからざるの春は、わが尤も深く心に醉へるところのものなり。われは更にちいさき弓矢を用ゐて人の心を射る愛情の童子が春を告ぐるの詞を聽かむ。

われは春の花なり、うるはしき戀なり。年若き男よ、うるはしき乙女よ、われは空の星なり、萠ゑ出づる草なり。われは流れ行く水のほとりに來り、青き草の岸の上にすわりて、汝を思ふて涙を流しぬ。われは行衛定めぬ蝶なり、花の露なり。われは汝を見ざるが爲に花の影に行きて苦しき嘆息を漏す、されどわれ汝を見るときは涙零つることいよ〳〵甚だし。嗚呼年若き男よ、うるはしき乙女よ、汝の涙をかくすなかれ。われをして汝の心を指さしめよ。汝なんぞ獨り考ふるや、汝なんぞ獨り悲むや。汝が途は遠し、汝が心は勞れたり。汝は再び戀せじと言ふや。汝はわれを恨めりや。汝はわれを捨てんと思へりや。げにわれは歌を作りて、夕べの星に向ひて汝を思ふ。

かく語れるは愛情の童子なり。われは最後に歡樂の童子が春をつぐるの詞を聽かむ。

九

あゝ年若き男よ、うるはしき乙女よ、われもまた春に隨ふ童子の一人なり。われは嬰兒の乳を慕ふがごとく、夏虫の火を慕ふがごとく、影の形を慕ふがごとく、盲者の光を慕ふがごとくに汝を思ひわづらふ。われは汝を見ざれば一時も心安からず。あゝ汝、汝は歡樂を慕ひ求むるや。汝はわれを思ひわづらふや。嗚呼やさしき心を持たざれば歡びを知ること難し、弱き心を持たざれば樂みを語ることかたし。汝なんぞ心強きや、汝なんぞ心烈しきや。われは汝と花の如き歡びを語らんとするに、汝なんぞ霜の如き心をもて吾言葉を聽かんとするや。かなしいかな汝は歡樂と石とを同じものと思へるや。見よや見よや、歡樂は夏の日にも止まらず、秋の日にも止まらず、冬の日にも止まらず、われは春の花の影に宿りて、花と共に來り、花と共に去る。

張杏子

秋詞

一葉落ちて天下秋を知ると古人も申したりき。ことしの夏こそは富士の高根を凌いで古き歌の心をも思ひ合せばやなど、指折り數へし甲斐もなく、はづるれば、はづる丶人の希望かな。友をうしなひてより兄に別れ、兄に別れてより世の網に陷り、げに何事もおもしろからず、かりそめに思ひ設けたる壯意遂に春の花のうつろひに似たり。青梅の落ちそめしころより三輪の片田舍にありて友の爲に病床を備へんと約せしこともありしが、この友一たび去つてまた歸らず、荷花まづ散りて荷葉隨つて破れ、いづこも同じとは讀みいでられけむ、秋は昔

も今も變らざりけり。

おもしろいかな造化のこゝろ。かなしいかな清秋のすがた。われは吾心を慰めんとて庭に立ち出で小池のほとりを一めぐりせり。自然と名のついたる翁の心はたやすく人間の味ひがたきものなるべけれど、この翁決してこゝろなきものにはあらず。誰か草木の黄落するを見、きり〳〵すのかなしき歌をきゝ、鶸、畫眉鳥、鶺のうらさびしき聲に耳そばだてゝ、ひとりをもひを傷ましめざるものやある。

秋には聲あり。土用の中のあつさにはおのづから蔭を求め、草を藉いて流るゝ水に寄り添ひしも、秋となりては日のひかり又親むべく、風ひいやりとして、羽織もはしく、シャツもほしく、足袋もほしく、月白く空澄みわたりて水もつめたきころとなれば、雨蕭々として秋の心を宿し、露團々としてを

のづから萬古のかなしみを漏らす。

われは更に小池のほとりをめぐれり。おもしろやかの不動明王には矜羯羅童子、制多伽童子の二人ありて、明王とゝもに給へば童子もとゞまり、明王走り給へば童子も走り、相追ひ相隨ひ、常に漠々たる白雲に乘つて明王を守護し奉ると聞けど、われはまた秋に隨ふ二人の童子あるを認めたり。一人は金剛の利劍を執つて右に隨ふなり。これ制多伽童子か。一人は微妙なる琴を抱いて左にあり。さらばこれは矜羯羅童子とも見るべし。げにやむかしより秋はかなしきものゝ一に數へられて、童子ひとたび琴を彈ずれば草露をのづから秋の聲を放ち、童子ひとたび利劍を振へば千山たちまちにして黄ばみ落つ。

姿やさしく心かなしきものは一人の童子なり。姿ものぐるは

しく心切なるものは一人の童子なり。われは先づ金剛利劍の童子を捕へてこなやかに秋の心を味ふべし。

いふなでもなく童子が利劍は蕭殺の器なり、破碎の道具なり。童子すでに蕭殺のこゝろあり、秋風豈に破碎のをもひなからめや。秋風すでに破碎のをもひあり、造化豈に蕭殺のこゝろなからめや。造化すでに蕭殺のこゝろあり、人間豈に破碎のをもひなからめや。

これを俗に言へば造化はなさにわが慈父にして、われは造化の悴なり。悴にも種々あるべし。役にたゝぬ悴もあれば、氣遠ひじみた悴もあるべし。白痴の悴もあれば、やさしい悴もあるべし。すねた悴もあれば、愚鈍な悴もあるべし。三百六十日脛を齕るといふ悴もあれば、見る目も哀れなる癩病患者もあるべし。奇なことをいふ悴もあれば、お茶のある悴もあ

るべし。盗みをなし、すりをなし、きんちやつきりをなし、人を殺し、女を犯し、友をたばかり、うそをつき、喧嘩を吹つかけ、はては野末をかけめぐりてのたれ死にするといふ悴もあるべし。怒り鉢の悴もあるべし。笑ひ上戸の悴もあるべし。又泣き虫の悴もあるべし。たとへ王侯といへどもこの悴の數には漏れず、市に走る蜆賣といへどもこの悴の數には漏れじ。

一夕孤燈のもとに沙翁の曲を讀んで、あへて杓子定規に詩聖の心をはかるとにはあらねど、僅に一葉の紙をへだてゝ、シャイヤイロックとバッサニオとが好一對の妙畫を味へり。シャイロックは利慾の外に世界を見ず、我執のほかに人あるを知らず、けちで、しわんぼうで、強慾不遜にして、唯我獨尊なり。バッサニオは溫厚の君子、擧動もやさしく、なさにこれボル

シャが意中の情人なり。されど曲をとぢ、目をねむりて考ふるに、シャイロックの利慾、バッサニオの愛情、別に彷彿としてわが心に迫る、かなしいかなシャイロックも一の執着なり。バッサニオも一の執着なり。かれはたけ〳〵しき天の邪鬼の如く思はるゝに、これは懐かしき天の使の如くに思はる。かれはげじ〳〵の如く思はるゝに、これは君子の如く思はる。嗚呼々々吾等尺蠖、これをある諷刺家のいふが如くに、お茶を濁すと嘲るは酷なり、又非なり、人生實に行路難し、誰かお茶を濁さゞらんや。嗚呼シャイロック、彼れ一の惡形のみ。嗚呼バッサニオ、彼れ一の儲け役のみ。沙翁幸に讀者を弄ぶことなくば、彼等は皆來りて一曲を演じ去るなり。一夢を演じ去るなり。彼等は皆造化の悴に外ならんや。嗚呼篤實勤行の清僧をして「デンマーク」の狂公子が悲歌を聽かしむること勿

れ。老杜をして感激して、孔聖盗跖皆な塵埃と涕涙せしめたる、其心むしろ哀しからずや。

すでに執着多し。執着の放れざるべからざることを知りながら猶放るゝあたはざるもの、これ人の姿ならずや。すでに繩墨多し。繩墨の捨てざるべからざることを知りながら猶捨つるあたはざるもの、これ人の形ならずや。すでに樂むべき夢の如し、また悲むべき戯れに似たり。誰か影の如くにして馳せ、春の花のごとくにして止まらずと思はざらめや。

われはこゝにいたりて始めて金剛利劍の童子が心を味へり。惶るべきかな童子の劍。傷ましひかな童子のこゝろ。童子は蕭殺なり。童子は破碎なり。蘭は匂ふに堪へず、菊は止るに堪へず。かの惡草と、かの驕蓬と、かの香菊と皆な同じく童子が利劍に仆る。おもしろいかな造化の心。か

なしいかな清秋の姿。われは造化に蕭殺の心あるを思へり。見よ童子は劒を提げて更に萬古の春を歸さんとす。童子よ。汝が惡草と驕蓬とを斬るの劒を以て、人間の執着を斬らしめんか。汝人間の執着を斬らんとせば、汝が心いかに悲しからなし。汝が香菊と幽蘭とを切るの劒を以て、社會の繩墨を破らしめんか。汝社會の繩墨を破らんとせば、汝が心いかに悲しからなし。汝をしてこの世と戰はしめんか。汝をしてこの世を蕭殺せしめんか。汝をしてこの世を破碎せしめんか。汝をして萬古の春を歸さしめんか。嗚呼々々童子、汝誰と共にか涕泣せんや。

凡夫の哀しさ、もとより聖のむねのうちを割つて見るべきよしなけれども、國破れて山河在り、城春にして草木深し、われはかゝる意味にてこの句を讀むの樂みを持つものなり。われは不知菴主人の譯筆によりて僅に罪與罰のをもかげをのぞいたるなみなれど、またかゝる意味にて狂客ラスコリニコオフの心情をかなしむなり。バイロンいたづらに世を憤ると見るは非なり。沙翁いたづらに世を罵ると思ふはあやまちなり。われはまたかゝる意味にてタッオソが悲涙を飲むことをたのしむ。

かく思ひとりてわれは更に小池を一めぐりせり。わが敗荷もて滿ちたる小池をめぐれるは、これにて三度目なり。目を擧げて孤雁の天に飛ぶをうかゞへば、をろ〳〵として涙零つること甚だし、悲戀の鍵を抱いてこの牢獄を開いたるはエルテルのをもしろきところなるべけれども、われには萬象のつめたきをいかんせんや。至情の涙を以て地獄を踏み破りたるはダンテの高き心なるべけれども、われには大空のひやゝかな

るをいかんせんや。青蓮は虚無といふ盃を持つたる飲みぬけの猩々が。ゲエテは至粋といふ鋏槌を持つたる鍛冶の正宗翁が。バイロンは自然と名のついたる天馬の伯樂か。非か。わが心は友を求めんとして反つて友に遠かるぞ口惜しき。感激せるわが傍に歩みよれる他の童子ありて、その姿を見るにいとすゞしく、その形はやさし。其手にはいみじき琴を抱いてわが爲に嘈々たる妙音を彈ずれば、おもしろやわが鬱屈せる心はこれを聽いて更に一歩を轉ずるかとも覺し。庭の梢にきて秋やかなしと告げ顔なる青目、鵯、ほうじろの友を呼ぶさま、わが破れたる耳にも更に新しきが如く、わが足もとにうとふ蟋蟀の歌も又新しき妙味をもたらすに似たり。めづらしや何の味ひもなく何のあたゝかみもなかりしもの、忽ちにして童子の琴にかきならされ、蒼々たる天、茫々漠々たる

地、萬象ふたゝび元の萬象にはあらざるかとも覺ゆ。うれしや牢獄にもおのづから明月の照らすあり、かなしや荒野にもおのづから秋風の吹くあり、おもしろや沙漠にもおのづから曉星の落つるあり、心地よや濁浪にもをのづから驚電の影の馳するあり。

われはこれより庭に出でゝ小池をめぐるごとに、いよ〳〵敗荷の泥に委するを悲めり。されどかの童子來りていみじき琴の音をかきならし、必ずやこの世を化して味ひあるものとなさずんばやなす。嗚呼白露あしたにひやゝかに三輪の秋ゆふべに深し。風のをとない今も猶さら〳〵としてやまざるは童子琴を抱いて吾破窓に立てばなるべし。

哀縁

江上の破屋を出でゝ凡そ半道ばかりなる水のほとりに釣をたるゝ一童子あり。秋もやゝ暮れ行く程に時雨などふりまさりて、水嵩もきのふのほどとは覺えず。河は遠く東より流れて、赤らみたる木の葉の瀬に浮くさまなど其さびしさいはんかたなし。誰に教えらるゝともなく蚯蚓をほり竿をたるゝことなど習ひ覺えて、けふは取るもの手につかず、破れたる股引に草鞋をうがち、例の破屋を馳けいでゝ何を釣るといふことも知らずうろ〳〵と東西に尋ねまどふ。ふと水のおもてを見れば名も知らぬ花の紅にさけるが、いつの間にか童子の前に流

れ來るを、たゞ〳〵無心にして眺めたるに、かの花童子に向ひて君は何を釣りたまふやといふ。さすがに童子も頬笑みておかしきことをいふものかなとは思へども、常ならば例のいみじきゑせ心にやさしき言葉もかくべきを、あまり心にくゝて二目とは見返らず。釣といふものを好めばこそ釣もすなれ。わが好みわが釣るに誰か譏り誰か恨む。たはむれも人にこそよれとかなたの草のかげに入り、釣るともなく釣らぬともなく糸をたるれば、またあやにくに捨てがたき風情のみなり。世にはおかしき花のあればあるものよ。見ず知らずの我にむかひて言葉をかくるさへあるに、べ君は何を釣り玉ふやといふ花の心のなつかしと、はてはかの紅の色おのづから童子の心の落ち初め、せめて今一度と思ふにつけ、かの花の姿またいつかはと心のみ先立つもあはれなり。されど再び相見んとす

れば、あやしや、流れはもとのまゝの流れにして身はまたもとのまゝの身にあらず。見れば何となく心はづかしきようにて、まばゆきばかりなる花の姿よくは得眺めず、しづかに汝はいづこより來りしやと問へば、かの花答へてわれは知らずといふ。さらば汝は流れていづこへ行かんとするやと問へば、かの花又答へてわれは知らずといふ。露もひぬまの命を嘆くはいかにうつろひ易き姿を持ち得て、花生の間などに挿まれ、花の常ならずや。されど世には靜かに花生の間などに挿まれ、萎るゝまでも人の眺めとなるものあり。あるひは紙に壓されてありし風情を物の本の間などに殘すものあり。あはれ汝の色は夕日にうつる星のごとく、汝のはなびらは水の底の玉のごとし。いかなればいみじき選びにも、もれまじき姿して、今またかゝる命の薄きを嘆くぞやと言ふに、さてもうれしき

人のこゝろかな。思へば影を恥づべきほどの姿にして、流るるにかぎりなく、漂ふにかぎりなく、いづこに落つる身の果と知らずして、獨り落ち行く心のはかなしやと答ふ。げにうつろひ易き汝の姿の凡そ世にある程のものとしも覺えず。われもさま〴〵の春秋にあひて、さま〴〵の花といふ花を見たり。笑ふがごときもの恨むがごときもの、眠むるがごときもの、媚ぶるがごときもの、月に落ち、水に浮び、風をいたみ、雨になやむ。されど消えてはうつり、うつりては消え、たえてかゝる思ひに心をなやませしことあらず。あやしきかな我心。あはれなるかな汝の色。そもや何者かこの世の思ひでに、天のはとりより汝の姿を盗み來り、あやまつてかゝる寂しき水に浮べ、送るともなく、歸すともなく、おのづから心を寄するにはあらずや。ひそかに汝の姿をうかゞふに、この世に

とゞまることを暫くもせず。さけば落ち、落つれば流れ、何をか慕ひ、何をか追ふらむ。こゝろみにわがさびしき心をもて、汝の上に載することを好まずや。さらば汝はわれと共に流れ、われは汝と共に流れんといふに、かの花あながちおぢたるけしもなくて童子の言葉に答へていふ。思へばこゝのはとりに漂ひしまで、君のようなる人いくたりと岸に沿ふて我と共に歩みぬ。あはれもろきは花の心なるよ。よしや頼みなき言の葉とは知りながら、またなさけめきたるかたに心もほだされて、せめてあやふき一ふしをたよりにもと後のことまで細々とうちかたれば、末かはらじなどゝいふ人の言葉さへ、今は秋風のそよとだになし。げにさまでつれなき人の心といふものなるべし。かなしやもろき花の心には、させる悟りのあるべくもあらず。けふはあすはとはかなき言葉をくり返し、見

まゐらせたるおもかげを心にうつして、時々はあたり見まはしそこにいますやなど繰言をかさね、別れしかたの空を心あてに、かなたの星のひかりのみ眺め暮すを、いや、語るまじきことなり。

思へば岸に沿ふて我とあゆみたる人のなかに、世に畫工といふものもありけり、されどまことに我を畫きしためしはあらず。また世に詩人とよばるゝものもありけり、されどまことに我をうたひしためしはあらず。げに風も吹きあへずうつろふ花の命とや、われはうつろふによつて流れ、流るゝによつてうつろふべしといふ。かく語り行くうち長途の草の枕を詫びて、心の友にめぐり逢ひたらんやうにも覺ゑられ、花流るれば童子もまた花と共に歩み、花止まれば童子もまた花と共に止り、はてはかの花の姿のゆかしく、なつかしくわざとら

しくまなこをそむくれば寂しさ哀しさいはんかたなし。

花よ。花よ。汝は何故に水の中流に浮んで流れざるやと問へば、われは岸に沿ふて流るゝことを好むといふ。げに稲妻のひかりもへだてぬべきほど、相見ておかしきことまで語はんは、せめてもの願ひなるべけれど、見よ岸邊には大岩、小岩、または枯木のたぐひなどかくの如くうづだかし。汝ひとたび身を觸るれば忽ちうろくづのうちにからまり、はてはそのうるはしき姿を失はんこといかばかりの愁ひなるよ。心しづかにかなたなる中流のうちに浮び、流れに隨つて下るに如かざるべしと言へば、さらば何故に君は岸に沿ふて行くことを好みたまふや。君もし一歩をあやまたば忽ちこの水に溺れたまふものを。かく語ろふうち雨はれて日は西の山かげに沈み、風蕭々として鳴き渡る山鳥の一聲この夕暮のさびしさを添ふ。

げに秋のゆふべの別れほど哀しきものあらざるべし、されど家の人のいかに待ち詫ぶらんと、行いてはまた花のほとりにかへりかへりてはまた行かんとし、見れば花は聲なくしておのづから水に流れ行くのみ。

あはれむかしより盲目と傳へたるゑにしのほども果敢なしや。かの花は瀨に乘りたりと覺しく、する〳〵と流れ行きけるが忽ちうろくづのうちにからまり、あはれげに廻り居るにぞ、見ればまなこも昏むばかりにて、いかにもして再び水に浮べんものと岩づたひに水に下りしが、今やさしのばしたる右の手のもろくもかの花にとゞかんとせしとき、古苔幾百年のさびに滑りて童子は花と共に沈みぬ。

亡友反古帖

北村透谷子の書捨たる反古にして、積んで其書齋に堆き中より、拔き集めて吾書架の一隅に保存し置きたるものあり、頃日かの反古を棚の上より取りをろし、塵をはたきて彼是と讀み行くに、亡友彷彿として吾眼前にあるが如く、轉た懷舊の情に堪えず。

飄遊を好める面白き男として彼を知れるものもあるべし。俠骨を愛し慈善を好みたる志士として彼を知れるものもあるべし。外面極めて飄逸にして內部極めて沈鬱なる詩人として彼を知れるものもあるべし。自然の研究者として、靈活なる評

家として彼を知れるものもあるべし。彼は常に吾に告げて曰く余には友少なし、また強て友を求めんともせずと。然れども彼は勉めて交遊を怠らざりければ、彼を知れる知名の君子も少なからざるべし。吾は彼と相知り相慕ひてより極めて深情ある親友として忘るゝこと能はざるなり。

歳月江水の如し。げに吾は舊友の再び見るべからざるを思ふごとに、歳月の人の希望と相容れざることを歎せずんばあらず。惜しいかな芳蘭夭折して既に二春秋、幽明境を異にして再び相語ること能はずと雖も、子よ、子よ、幽界の事は子が生前に於て想像せしが如きものありや、否や。いかに冷たき泥土に覆はるゝとも、いかに重困しき石碑を戴くとも、いかに一點の日光だも通せざる暗孔に押込められるゝとも、子は今や何の傷むところ何の羈絆を苦しむところなきか。春くれば

櫻の花の子が墓の上に散り、秋は秋草亂れ茂りて墓畔に露の玉の如きものありとも、子は今や何の情を動かすところなきか。今一度人間世界に歸り來つて舊友と相見ることを欲せざるや。嗚呼子よ、子が歩みつゝある「死」とは夫れ詩人の歌ふ眠の如きものか、眠ならば樂しき眠にてもあれかし。

透谷子戯曲に志あり。彼が書捨たる反古を見るに、戯曲の稿を成さんとして成らざりしもの頗る多きが如し。彼が遺筐を事は一朝一夕にして成るものにあらず、夫れ鬼神をあはれと思はせた韻文に富めり、さかも多くは未定稿なり。私に思ふ文藝の武き人の心を動かし男女の間をも和ぐる迄には、必ずや數多らず、其韻は一世の韻にあらず、其琴は一人の琴にあの詩人が熱情と苦心とを合せて、其の聲、其の力、其の火、其の涙、皆な活けるものとなりて琴心に宿らずんばあらず。

吾は亡友の反古をくりひろぐる毎に、今日の詩人の苦心を思ふに堪ねざるなり。

聽く「エオリヤン」の琴を窓前に懸くるや、風來つて之に觸れて音を成すといへり。思ふに詩人の生涯もまた斯の如きものあるか。透谷子が始めて詞壇に志せしは十九歳なたは二十歳頃なるべしと覺ゆ、當時風南子、無性子などの號あり。その頃の反古多くは散逸して首尾全からざるもの多しと雖も、草稿の吾許に存せるものにて、江藤浩作、新奇好男子(脚本第四齣まで會話體)、南洲の石碑、薄命、袖はぬらさじ(韻文)、桃太郎遠征記、小兒の時、貴人滑稽流の詩として中等以上の人士が遊惰放縱なるを詰責すべしとあり)、東北振興中原之鹿(小説又脚本めきたり)、林中會議、四條綴(脚本草稿)、世の感、文學の平天地、志士の門出、僧雄正坊、南洲翁(脚本第一齣丈)、これ

は小説脚本韻文小品等の題目にして、論文の草稿には、女子に就て、嗚呼遊廓の大弊害、自由黨自身の病性、日本の婦人に代り俯仰天地に訴ふ、などあり。

少年より大人に飛躍せりとはテインがバイロンを評したる語なり。透谷子の如きも亦然りと言ふべきか。彼が思想上の歴史に於ては、一歩は一歩よりも高く登れるにあらずして、寧ろ點々飛躍の痕を留めたるが如し。彼が二十二歳より二十三歳頃までの反古と思はるゝものには、人間村漫遊記、別乾坤捜索日記、初夢、地獄極樂界巡遊日記、我がいほり、お君、薄命兒、篁村翁を評す、渡守、太郎、東屋、無我村、漂流人、夢中の夢(韻文、嗚呼かく弱き人ごゝろ、嗚呼かく強き戀の情などの句あり)、たびごろも、平家行、常盤曲、當世文學の潮模樣、現今文學の批評、義經曲、春の曲、夏の曲、秋の曲、

冬の曲、美文學總論、おその(脚本にして幾度か稿を草したるものと見え稿本三四あり、「余は憶せずおそのを出さん若し多くの駁擊者あらば一部の反駁書を出すべし」などあり)荒野の戰ひ、(其脚色は、非常に豐饒なる野ありてこゝに曾て蛇を平げたる一の大なる蜒蜿が野の長となり、でんゞ虫が箱をかついで配權を執行し居り、其臣下には虻、蜂、とんぼ、螢、芋虫、毛虫、蚯蚓、蜥蜴、まつ虫、すゞむし、くつわむし、蛙、きりゞす、蟬、蜻蛉、赤とんぼ、鍋、ばつた、ひぐらし、かじか、虱、蚤、守宮、蟻、油虫、蠅、蚊、げぢゞ、百足、わらじ虫、けら、ふくろぐも、くさひばり、玉虫、黄金虫、などありて、雙蝶を主人公となし、こゝへ蛇外より來りて彼等と戰ひ全く荒野となるの趣向)これら先づ題目の重なるものなるべし。

次に彼が蓬萊曲を草せしころの稿には、月の宮(仙遊子なるものを設け、富嶽の頂上に登り、風を呼び雲に駕して遙かに空中に舞ひ、人間界の汚濁を窮めて多くの仙人に逢ひ、遂に月宮を尋ねて無窮に入るといふ脚色)、護良親王(脚本の草稿)、往きし春、文覺上人、餓、春駒、西行法師を論ず、蝶の夢、源九郎義經(脚本草稿)、マンフレッドとフォースト、バイロンを論ず、猿(猿)と題する雜誌を刊行し、凡て猿に關する記事と挿畫とにて紙面を充し、滑稽まじりに痛罵冷笑を行るの趣向)、當代の社會と文學、當代の文學に就て、などあるうち、

春駒(斷篇)

第一　門出

北風に窓閉されて朝夕の
伴となるもの書と爐火、

軒下の垂水と共に心凍り
眺めて學ぶ雪達摩、
けふまでこそは梅櫻、
霜の惱みに默しけれ。

霜柱きのふ解けたる其儘に
朝風ぬるしけふ夜明け、
書の窓うぐひすの音に開かれて、
顏さし出せば梅の香や、
南か北か花見えず、
いづこの杜に風の宿。

耳澄まし暫く聞けば鶯の音は

「春」てふものをおとづれぬ。

*　*　*

書とぢよ、筆措けかしといざなふは
いづこに我をさそふらん。
冬に慣れにし氣は結び、
杖ひき出づる力なし。

（この間見えず）

ひとむち當てゝ急がなん。
花ある方よ、わが行くは、
ゆふべの夢の跡戀し。

第二　雪の中

來し道は細川までを限にて
霞に迷ひうせにけり、
春の駒ひとこゑ高く嘶けば、
吾が身もやがて烟の中、
戀にむせびてうなだるゝ、
招きし花はいづこぞや。

夢にまでうつりし花の面影を
訪ね來て見れば跡もなし、
深山路の人家もあらず聲もせぬ、
廣野の中にわれひとり、
かこつ涙や水の音、

花ある方にそゝげかし。

おりたちて清水飲まする駒の脊を
撫でさすりつゝ又一ト鞭、
勇めどもいづれをあてと去らま弓、
思ひ亂れて見る梢に、
鳥の鳴く音ぞかしましき。

立ち籠むる霞の彼方に驅入れば、
小高き山に岩とがり、
枯枝は去歳の嵐に吹き折られ、
其まゝ元梢に垂れかゝる、
さびしさ凄し、たれやたれ、

われを欺き、春告げし。

駒かへしこなたの森の下道を、
急き降れば春雨の、
降りいでゝしよぼぬるゝわが足元を、
かすかにはたく羽の音、
かなたへ隱れて間もあらず、
鳴く聲きけば雉子なり。

マンフレッド及びフォースト(斷篇)

大陸文學漸く其絶頂に達せんとし一世を睥睨せしゴエテも既に老境に臨み、其戴きし大桂冠未だ嗣ぐべき人あらず。忽ち大月をアルプス山上に懸け來つて一篇のフォー

スト、ゴエテが最後の傑作として、ゴエテが桂冠の眞價として、全歐洲を震駭せり。此時に當つてはシエーキスピーアの崇拜熱も漸く薄らぎて英國文學何となく寂寥たる觀なきにあらず。前世記の幕と共にポープ、クーパア等の群雄は冷却せる玉露の下に、無言の人となりて捲き去られ、シエリー、スコット等未だ大陸文學に對して傲顏なる能はず。

フォースト出でゝより幾年ならず、以太利に飄遊して豪逸峭崛の名をチャイルド、ハロルドに震ひしバイロンの手に成れるマンフレッドなる戲曲出づ。バイロンは此時尙ほ壯にして其の心想漸く詩情より實動を渴望するの域に進み、其書架を、其寢牀を、其醫師を、其從者を載せて、富豪なる貴族の華奢を盡しこアルプス山を越ゑ、自ら詩

界のナポレオンを以て許さんとし、峰巒を疾呼し、懸瀑を號令し、閃電暴雷を指揮し、崇嚴なる自然を透視し、其幽玄なる至境に向つて萬斛の熱涙を傾瀉し去つて凱旋のシイザルに似たる意氣を以て三寸筆頭に迸洩せしもの即ちこのマンフレッドなり。

ゴエテの始めてマンフレッドに接するや、拍手して己れのフォーストに想を同ふするを歎美し、能くも斯の如く其形裝を異にして類似せる奇想を縱にせし者かなと言ひし。而して、バイロンは自ら言ふ、われ獨字を解せず、フォーストを讀まざる前にマンフレッドの稿を脱せりと。フォーストはゴエテの傑作なり、世界の傑作なり、マンフレッドは實にバイロンの傑作なり、世界の一大奇觀と稱するも假譽ならじ。而して彼も鬼神談既に古文人の談柄に上

るのみにして文界將に實際に進まんとするの時に成り、此も實に近代の鬼神を驅馳し、新創の幽境に特異の幽玄的超自然の理想を着て出でたり。第十九世記の雙兒傑作と呼ばるゝも豈に怪しむに足らんや。

ゴエテも厭世家なり、バイロンも厭世者なり、ゴエテは其日記に書して「われ運命の好侶として生れ、福祥世に全かりし、然れども今年七十三歳、回顧してわが過去の生涯を見るに四週間の樂日月を得し事あらず」と。彼れ自ら言へり、わが詩を作るは自己を責むるなり、自己を罰するなりと。然れども ゴエテは其厭世家たるの分量に於て遙かにバイロンに及ばざりき。抑もバイロンが、天地を蹂促たりとし、人生を悲戲の最極と觀ずるに至れるは、其搖籠の中にありし時より、否な寧ろ彼の幼少なるバイ

ロンの爲に泣き、又た屢〻小バイロンをして暗室に欷歔
徹宵ならしめし母氏の胎中にありし時より既に其厭世的
迷想の根蔕を固ふしたるを見るべし。而して又其美術に
關する兩詩人の位地を熟察し來れば、兩者の理想の上に
及せる隔離容易に看破することを得べし。ゴエテは古人
も言ひし如く詩人よりも寧ろ美術家なり。其年齒未だ少
かりし時山水の絶景に眩惑せられて、詩人と畫工との間
に其前途を彷徨せしめて幾度も心を玆に迷はせりと言ふ
ものあるを見ても、後來一世を震動せし大技倆は其詩精
の分量を持ちたりしよりも多く自然の奥妙を恰も優婉な
る少女が己れと同年輩なる己れと同位地なる美人の畫に
對して精微に觀察し細緻に分析するが如き美術的風流詩
想の粹を踏破したるに歸ずべし。

バイロンに至りては然らず、其詩は即ち神微なる自然の
上に幻寫せるバイロン自身なり。卑猥なる人生を怒りて
常に暴騰せる火煙なり、休憩すること能はざる慰藉する
こと能はざる所謂「目を開きながらに切齒する」熱汗なり。
思想は實にアルプス山より落つる崩雪の如く、然も想像
は一小詩人よりも多からざるは、抑も彼が自己に餘りに
「詩」にして、想像を容るゝの閑室に事欠けばなり。故に其
詩の如きも往々にして咄嗟の間に成り、熟練を積む事な
かりき。プリゾナア、オフ、チロンの名篇も僅に三日子
を費せしのみなりと聞けり、之を以て見るにバイロンは
寧ろ詩人にして美術家の聲譽は最も少なく荷ふ事を得べ
きなり。

月前の柳

まねく手はほそくたゆめど空とほく
なびかぬ月のうらめしきかな

花間蝶

こゝろありやなしやはしらず花のうちに
うさをはなれぬ蝶ぞゆかしき

雨後の花

雨すぎてうらめしげなる花のおも
ちるまで友とちぎらざりしに

逸題

あさしとなちぎりとがめそうきよには
はなれがたきもはなれやすきを

史

ふみわくるみちのおくこそいづこなれ
まよへとはたがおしへそめけん

發句

行くへさへ音もきかせぬ岸の水

五縁十夢とは平生彼が戯曲に對するの希望にして、其内五縁の方は一縁も筆を染めず、十夢の中、透谷集に出でたる斷篇の惡夢、別に毒夢と題せしものも見たり、蝶の夢も亦たこの

夢中の一夢なるべきか。

蝶の夢脚色

第一齣　雙蝶を點出し花上に舞はしめ
第二齣　二人の少年男女を出して熱き愛情を寫し
第三齣　再び雙蝶を點出して
蝶と人と同じきが如く同じからざるがごとくすべし

また左の如き想像と脚色とを記したるものあり、

戯曲

蚯蚓を見て感あり
蚯蚓、鼠、猫、狐、等いろ〳〵のものを人間位の大きさにして、形を造りて各その思ふところを言はしむべし、而して之を人に比較すべし。

智情意の動物をして各其性質を顯はさしめば妙

吾が知りてより透谷子四度居を轉せり。高輪の舊寺に寓せし時、庭前草花あり、花園に隣りて畑あり、室のうしろは老杉欝蒼古墳壘々としてかの「鬼心非鬼心」を草せしは爰なり。高輪を去て芝公園紅葉館の裏手なる小堂に移りしや、絃歌手に取るが如く聞ゐ、古木堂を擁し、蚊多く、室暗く、猫を捨てられて心を傷めし曉も度々なりなぞいふ話もあり、老鼠堂の庵に近くして永機宗匠をやりこめたる話も聞けり。こゝも住みうくてや麻布に轉じ、山羊を買ひて面白からず、霞町に轉じてまた面白からず、後ち相州國府津の舊寺の一室を借受けてこゝに一家を樂しみ、波の音に蝶の夢を破られて再び都に上

り、芝公園の舊堂に歸りて病んで再び起たざりき。嗚呼想ひ來れば吾が眼前に浮び出でゝ、吾をしてこの文を草せしむと雖も、文に情なく詞に力なく不肖徒らに彼をして幽界のかなたに一微笑を催さしむるに過ぎざるのみ。

友に寄するの書

鬼才君の如きは眞に稀なり。きのふは共に菊の花の間をそゞろあるきして、談たま〳〵詩文のことに及ぶや、君の縱横なる詭辯はわれをして全く饒舌の餘地なからしめたり。いかにせばこの文壇の寂寥を破りて百花爛灼たる春にめぐり逢ふべきやとは、けふこのごろに始まりたる悲嘆の聲にあらずと雖も、君が漫罵痛笑、耳熱し談進むの時に於ては、われをして明治の趣味は大火の西に流るゝが如く爛灼たる詩日に隨つて既に業にあなたの空に沒したるか、今日の文壇は僅に星の光を殘したる夕べの空の如くなるかと思はしめて、殆ど君が掌

上に弄ばるゝことを忘れしむ。

何が爲に文壇かく迄もさびれしぞとは、好んで君の問ふところなれど、何が爲に文壇かく迄も高壯雄大なる思想に乏しきぞとは、また好んで君の問ふところなり。君が世の作者に求むるの切なるや、恰も獄吏の刑鞭を振ふがごとく、或は靈妙なる觀念に乏しといひ、或は生命の活泉、高潔なる情熱に缺けたりといひ、或は幽妙の靈機に觸れずといひ、或は玄々不可思議なる他界の恐怖を感せずといひ、或は圓滿美妙これを微にしてはウオルヅウオスの野花一枝の如く、或は沈鬱悲痛これを大にしては狂惡マクベスの如く、殆んど讀者をして茫然として自失せしむるが如き美妙の心に乏しきものなりといひ、感じ易く迷ひ易きこと蝶の如き作者に向つて、ありとあらゆる鐵槌を振ひたまへり。

青春年少、況んや心花の如く、情火の如き時に於ては、意馬の奔逸殆んど羈絆する能はざるもの多し。一日の内彼は三たび樂み、三たび疑ふことを禁ずる能はず。動き易きものを算すれば彼は先づ自己の心に指を屈せざるを得ざるなり。或時は一躍、所謂寶珠乾坤に飛び入るがごとくに思ひ、或時は一落、紅蓮大紅蓮の地獄界にさまよふかと疑ふ、かくの如きものは青春の常なるべし。明治の文壇いかに長足の進歩をなせりとも、いかに未曾有の變遷を有せりとも、猶妙齡青春、これを以て飽き易く動き易く好尚傾向忽ちにして變じ易く、老成の士をして其志の頼みがたなく其情の危なげなるを嘆せしむるにはあらざるか。忽ちにして爛灼、忽ちにして蕭條、かくの如き文界のありさまは、寧ろ青春妙齡萬想相交ること今日の如き時に於て怪むに足らざるがごとくにも思はるゝ也。

自然は無盡藏にして渺として測り知るべからず。文海のことも亦然り。

然れども測り知るべからざるが故に自然に近づかざるは、すずしき汐の來らざるを悲みて怒つて文海を濁さんとするに同じからずや。嗚呼蓮落ちて菱生ず。これ實に君の作者に望みたまふこと厚き所以ならずや。然れども今日文界の蕭條たるを以て其罪半ば作者にありとせば、かくのごとく文運の振はざる其罪また半ば批評家の上にありと謂はざる可らざるなり。萬が一自ら責むるに薄くして作者を責めたまふに厚きがごときことあらば、蓋し酷ならずや。

聞くレッシングが非凡なる筆を抱いて騷壇に立ちしや、當時國民の趣味未だ完たからず、純然たる獨逸文學の基礎未だ固からず、「ライン」河を渡つて來る佛蘭西の文學にあらざれば何物

も美ならず壯ならず。是時に當りて獨逸文學の起さゞる可らざることを主張し、百難を排して佛蘭西一派の趣味を攻擊し、當時の作者をして其岐路に迷ふことなからしめ、ゲエテ、シルレルの詩人相繼いで興り、遂に千古動かすべからざる國民文學の基礎を置くに至れり。評家多く今日の詩人に望むに雄篇大作を以てしたまふ、今日の評家に望むにレッシングの苦心と熱情とを以てするも亦可ならずや。

想形の論も久しいかな。今日の評家が作者に望みたまふや、常に形の巧みになづみて想の靈に及ばざるよしを言ひたまへり。思ふに今日の批評家の謙遜なる、想の形にかなはざるを說きたまへども、多くいかなる想を執れといふごとに及ばず。多くの作者もまた想の形にかなはざるを熟知すれども、評家が直ちに是れ詩なり是れ想なりといふべきものを指して作者に

教ゐたまふこと少なきが故に、空しく今日の詩人をして希望と情意とを抱ひて岐路に泣くが如き思ひあらしむるぞ口惜しき。

文藝復興の機運先づ日暖く花深き以太利に湧き出でゝ歐洲大陸に及ぼせしころは、恰も枯木の花の蕾を發するが如く、俄然として舊自然を脱して新自然の懷に躍り入り、昨日の新は既に今日の舊、よろづの思想互ひに行き、互ひに動きて、理想界にあるものをして殆ど狂せしむるが如きものゝありしといへり。詩人が一生の重荷として負ふべきもの、考究すべきもの、洞察すべきもの、元より多しとは言ひながら、今日革新の機運にありては、白雲、黑雲、山をかすめて飛ぶが如く、萬想飛び來つて詩人の心を襲ふが故に、評家の熱きこゝろをもちて之を助けたまふに非れば、忽ちにして一花、又一花、嗚呼

々々蘭桂夭折の嘆きあるを免れ難し。

萬想すでに流れて明治の騷壇に入る。上は希臘の古劇より、エリザ朝の戲曲、以太利の詩、佛蘭西の文、又は獨逸の詩歌戲曲小說よりビクトリア朝の叙情詩に至る迄、よろづの詩人各其美妙なるころもを着けて、星屑の大空にきらめくが如くに、燦然として今日理想界の天にあり。歐洲南部の趣味と北部の文學とを合せ觀るさへあるに、之に支那文學の美、吾國の趣味の粹を集め、合してこれを一鼎の中に置き、天才の火を以て之を熔かさしめば、まさにこれ一世の大觀にして快心の事業萬古あるべからざるの美なり。あらゆる粹の粹をぬきあつめて、よろづの美を一堂のうちに集めよとは、萬想相交るの今日新しく心地よき自然の傾向にして、調和的の思想は多く作家の心を支配するものゝ如し。

なにものを見ても茶にする程の洒落なる心を持てるものは、ダンテの情を守る、ゲエテの情を放つ、二者甚だ調和し難きものゝ如くに考ふれど、寛容なる調和者の目には共に之を集めて、打つて新しき美玉となし難しとも思はざるなり。僅に心を一境に放つほどの僻見より見れば、マアガレットたゞまビイトライスを琢くの他山の石の如くに考ふれど、高壯遠大なる調和者の目には香菊と幽蘭とを合せて更にうるはしく新しき想花を開かしめ難しとも思はざるなり。

自然は萬葉古今の詩人の心にうるはしき花を贈れり、又言ふべからざる慰藉を贈れり。春は來り花はさけども今日吾人の眼前に横はれる自然は、昔時の如く充分なる慰藉を明治の詩人の心に贈らざるか。吾人と共にある新しき自然は、他邦の花を移し草を植ゑざるべからざる程に乾燥なるものなるか。

晝には晝の日を照らし、夜には夜の月を照らして、吾人を慰むるが如くに見ゆる今日の自然は、遠土の日月の光を調和せざるべからざる程に今日の詩人の心につれなきか。

ゲエテ未だ若かりしころ獨逸にトレエン侯といふ人ありき。極めて繪畫を愛し當時の名あるものを集めて各其技を競はしめ、侯また其新作を鑑賞して鼓舞至らざるところなかりしかば、深宮殆んど繪畫を列するの餘地なき程となれり。侯心に謂へらく、或る者は人物に長じ、或る者は遠景に長じ、或る者は草木、或る者は花、もしこれらの畫工をして各其の長ずるところを一つの畫題の中に畫かしめ、合せて一大作となさしめば、いかなる十全圓滿なる完璧をか成すらんと。こゝに於て先づ山水の美なるものを畫かしめ、次に他の畫工をしてうるはしき群羊を畫かしめたり。家畜に妙をこそ得たれ、こ

の畫工さすが慣れざる業なれば山水の名畫も群羊の爲に狹まくるしくなり、更に他の畫工の牧人を紹介し、又は旅客を畫くに及びては、いよ〳〵山水狹隘となりて、山水は山水、羊は羊、牧人は牧人、旅客は旅客、別箇々々にふるまふものゝ如く、はては山水の畫工小羊の畫工の爲に苦心を傷けられんことを恐れ、牧人の畫工は旅客の畫工の爲に損せられんことを憂ひ、遂に畫工互ひに爭ひを生じ、シイカッツといへる隱遁的、ヒポコンデリア的の美術家の如きは殊に樂まず、トレエン侯が新企圖も遂に其志を得ずして、畫を成さずしてやみぬとかや。

もしかの調和的思想にしてトレエン侯の新畫の如き結果を生ずることあらば、今日の評家は豫じめ詩人を戒めたまふところなかるべからず。限りなき神佛と雖も各其一面を顯はして

人間に接したまふが如くなるに、限りある人間の身にして、靈妙不可思議なること八面玲瓏の玉の如く、ありとあらゆる東西古今の粹美を包容して猶餘りあるもの、これ評家の今日の詩人に望みたまふところなるか。天才は金の如し。烈火も燒くべからず。今日の詩人は其焜中に東西の金塊を入れて、無限の天才が作りなせし粹美を熔和するの力ありや、否や。混じ易きものは不醇とのみ思はれしに、醇の醇なるもの亦得て混ずることを得べきか。よろづの東花西花を移し植えて植物園の識りを免かれ、別に明治の趣味を滿足せしむべき庭園の眺めを成すべきものか。彌々近づけば彌々調和し難く見ゆる諸天の星くずを集め合せて、光彩陸離たる陽日を完成し得べきものか。今日の評家の肩にかゝれる荷の重さは實に新詩人の肩にかゝれる程のものなるべし。

然れども古代希臘の美術が日暖く花深き歐洲南部に落ちて、こゝに始めて文藝復興の機運を呼び起し、山高く風勁き北部に入りて深くも其「ゴオル」人種的の激烈なる性情を和げたるは史に精なるものを待たずして能く人の識る所なり。希臘の美術は實に歐洲文藝復興の他山の大石なりと謂ふに非ずや。然らば我國の文藝もこれを泰西の趣味に磨き、これを漢土諸朝の文學に琢くべき、純粹なる日本想のおかるべからざるよしは君の好んで說き給ふところなり。

われは曾て帝國文學に於て希臘思潮といへる長篇を讀み、深筆よく古代の沈靜美妙なる思想を傳へんとしたまひしを謝す。聞く希臘は美術の淵源、叙事叙情の詩及び戲曲に至るまで皆深奥なる域に進み、西歐近世の詩歌皆なその泉流をこゝに發したるものといへり。これ實に吾國純粹なる日本想を磨くべ

き青砥の妙なるものか。ゲエテ、バイロン、ハイネ等の詩人は言ふも更なり、十九世紀の新思想に呼吸するものは皆一種不健全なる暗潮に浴せざるものなしといへり。これ又吾日本想を琢いて新しき美玉となすべき荒砥の妙なるものか。靜和なるシェレイをすら捕へたりといふこの新潮の東するもの、清流濁流ともく吾思想界に流れ入りて、果して如何なる風濤を生ずべきものか。その新しく悲むべき濁流の純粹なる日本の想花を洗ひ去るが如き傾向はあらざるか。この暗潮に勝つべき程の慰藉を指して、詩人に敎えたまふべきものは今日の批評家にあらざるか。

英人の詩に適し、佛人の文に適するが如くに、吾國の文學は文に優にして詩に乏しきものなりや、或は不完全なること吾國今日の言語の如きものと雖も、猶ほ之を驅使するチョオサ

アを得て始めて詩の花を開くべきものなりや、或は又吾國の詩の醇なるものは既に早く萬葉の頃に開落せしものなりや、凡そ是等の問題は評家の詩人に敎え。詩人をして機一轉せしめ、詩人を開發して更に新自然に向つて領土を開かしめざるべからざることなながら、われは更に君に向ひて、直ちに是れ日本想なりといふべきものを指して、詩文の依つて立つべき領土を詩人に敎え給はんことを望むや切なり。知らず今日の評家はいかなるところへ青春妙齡の詩人を誘ひたまふて、いかなる無盡藏より生死榮枯の深味を學ばしめんとはしたまふらむ。

「ロオレル」の樹の高く、「レモン」の樹の花さくといふ以太利の野は、「シナイ」山の上に逍遙したまふて聲雷の如くなりしと云ふ高烈なる神の駐りたまふにふさはしからず。日熱く、風勁く、

草痩せ、石多き亞弗利加の荒原は、花をかざり琴を抱きたまふ優和なる希臘の神の一日も忍びたまふべきところにあらざるべし。招かば來り給はざることなき、とつくにの神も、吾山水と吾人情とによりては、僅かに其空殿のみを殘したまふて、知らぬまに既に遠く歸りたまふこと少なからず。

モオゼが「シナイ」の高嶽の巖上に伏してエホバの神より無限を學びたまふ間に、赤人は富士の高根のかげにさまよふて吾國の自然を學びたまへり。悉太太子が菩提樹の蔭に靜座して無常寂滅を觀じたまふ間に、圓位上人はみよしの丶霞を分けて散り易き櫻の花を惜みたまへり。曾ては鳴神を聞いて見れば かしこし見ねばかなしもと歌ひ出でたる萬葉詩人の生れたまひしところ、曾ては花の色のうつりにけりなと讀み出でたる絶代佳人の落魄せしところ、この里を愛し、この花の影に宿

りたまふて、今日の詩人に櫻の花を惜むことを敎ゐたまふべき、うるはしきものはあらざるか。其聲は直ちに吾國人の聲にして、君が所謂日本想ともいふべきものを今日の詩人に敎ゐたまふべき。あたゝかきものはあらざるか、限りなきものはあらざるか。

儒敎の道か、老莊の敎か、佛想か、自然主義か、愛國の念ひか、俠勇の心か、ヘブライの想か、ヘレニズムか、將たまたルウソオ、ボルテエア等が鼓吹せしといふ如き革命的の思想か、バイロニズムか、ウエルテリズムか、いづれか吾風土人情に適し、いづれか吾純粹なる日本想の基となすに適すべきや。

他界を尋ねんとせば先づ人間を尋ねざるべからずといふ心より、人間を尋ねんとせば先づ男女別ちを尋ねざる可らず、父

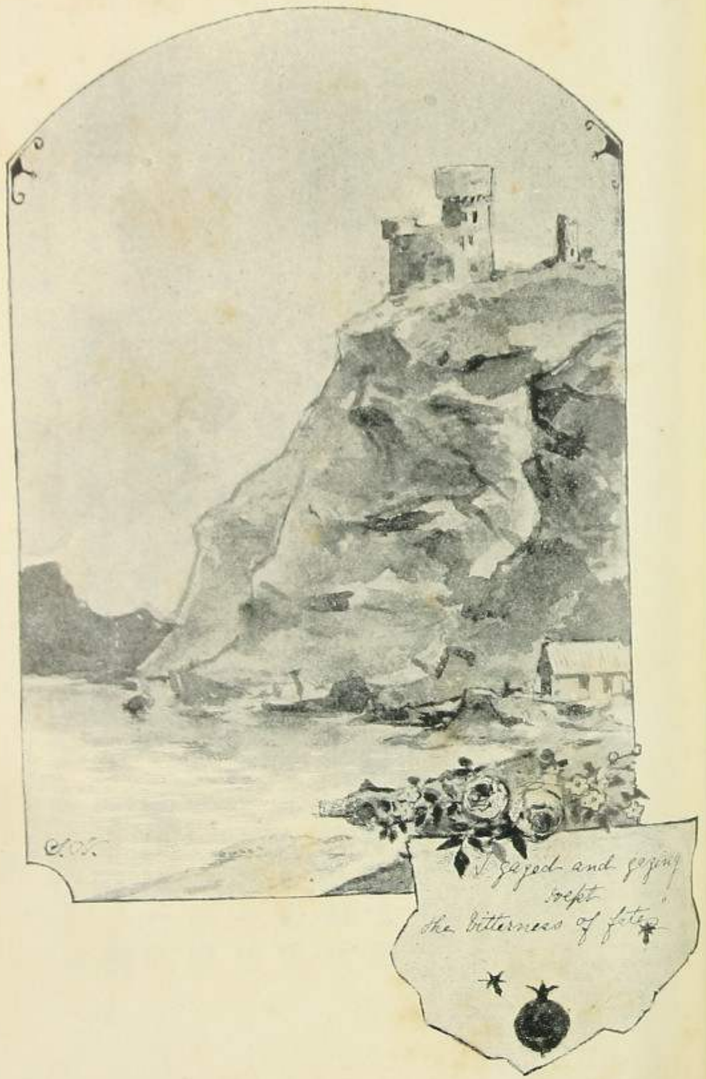
母夫婦兄弟君臣朋友にわたりて、愛憎こゝに起り、哀樂こゝに生れ、明暗こゝに湧き、生死こゝにつながる。然らば深奥にして乾燥せる哲學を離れ、直ちに吾人の眼前に横はれる自然の裡に躍り入り、吾國男性の特色と女性の特色とを極めて、其心に純粹なる日本想の基を尋ね、以て詩の國に吾人の活きたる領土を開拓すべきものなりや。是れ日本の男性なり是れ日本の女性なりといふべきものを窮めて、其間につながれる靈妙なる金鎖に、是れ日本想なり、是れ詩なり、是れ世間なり、將た又是れ自然なりといふべき秘訣を學ぶべきものなりや。

あゝエルテル、汝は新しき世界を歌へる天才として千古の詩人にはぐくまれたれど、猶獨逸の男性の粹の粹なることを失はざるにあらずや、然らば直ちにこれ日本の男性なりともい

ふべき特性特色の、かのヘルマン。マイステルと異なれるところはいづれぞ、この胸中日本の純粋なる思想を宿せりと言ひ得べき男性は、吾人これをいかなる處に學ぶべきや。あゝシャアロッテ、汝は青春年少の詩人の心に映じたれど、深くも「ライン」河畔にさくべき花の色を宿せるに非ずや。夕顔か、小春か、梅川か、重の井か、お夏か、直ちにこれ日本の女性なりと言ふべき特色の、ビイナス、ビイトライス、マアガレットと異なれるところはいづれぞ、山吹のさきて流るゝ吉野川の水を汲み、嵐山の花をうちながめて、こゝの男性と生死憂愁を共にすべき女性は、吾人これをいかなるところに學ぶべきや。

今日こゝにあり、われらは今日と共に歩めり、われら不幸にして自ら誇るべきものなし、たゞ誇るべきものは今日のみ。

これありて萬象味ひあり。これありて始めてわれらは過去の化石たることを免かるゝを得んか。今に駕し、今に御し、活きて理想界に遊ぶの君よ。思ふに君はこれ高才逸足の士、胸中別に清風の通ずるにあらざれば、何ぞ今日の文壇を罵りたまふこと斯の如くならむ。また何ぞ詩人を愛したまふこと斯の如くならむ。それ作者は一種の蝶なり。其羽はかよわくして嘲罵の一鞭に仆る。願はくはあたゝかきこゝろをかきたてて、蝶をはげまして活きて美妙なる花のもとに舞はしめよ。



I sighed and sighing
kept
the bitterness of fate

西花餘香

一

サイモンヅ以太利に遊びて以太利紀行を作る。かの「ローレル」の樹の高く「レモン」の樹の花さくといふところ、泰西の文士が以太利紀行を作るのあたゝかきは、わが國の俳人が松島紀行を作るのさびしきに似ず。總じて泰西の文士はあまりに饒舌なり、吾朝の詩人はあまりに沈默なり。芭蕉の紀行を名づけて奥の細道といふに、誰かうべなはざらむ。サイモンヅが紀行を以太利の細道とせばいかにをかしからまし。忘れがたきはサイモンヅの「秋の逍遙」なり。「秋の逍遙」は紀行中の一篇。更に忘れがたきは逍遙して古城に遊ぶの一節なり。庭には「レモ

ン」の樹、柘榴の樹の實もて枝もたわゝなるがあり。城壁に倚りて望めば山河の眺め一眸のうちに入る。ある秋の日の夕ぐれ、サイモンヅ友と共にこゝに來りて徘徊去るあたはず。去ばらく城壁にもたれて風光を賞するうち、ふと其友の倚りかかれる古壁に左の如く記しつけたるを見出しぬ。そのことば、われは眺め入りたり、眺め入りつゝ運命のはげしさに涕きぬ。

"I gazed, and gazing, wept the bitterness of fate."

讀む人は好古のサイモンヅ、ところは花深き以太利の古壁、記せしぬしを誰ぞと問ふによしなけれども、なさけあり涙あるはこの一語なり。知らずや、こゝろありて尋ねよれる以太利狂の旅人のみかは、朝夕こゝろなくこゝに來りて、われは眺め入りたり、眺め入りつゝ運命のはげしさに涕きぬと、古壁に倚りて涙を濺ぐ花のごとき君もあるべきを。

二

ハイヲ年いまだ若くして時の大家ゲエテを慕ひ、この盛名の詩人を見まほしきことに願へり。長き冬の夜の燈火を友とするごとに、もし一度ゲエテに逢ふことあらば、かの事をや語らまし、この事をや語らましなど、さまざまに思ひ設けしといへり。幾夜か其日を想ひみて、始めてなのあたりゲエテを見る。ハイヲは彼に語るに「サクソニイ」の梅の甘美なることを以てせしに、ゲエテはこれを聞きて、たゞ微笑せしのみなりといへり。悲劇をすら微笑を以て草する秀才のことなれば、ゲエテの微笑もめずらしからねど、逢ひ見ては盡きせぬ物語、ありあまるほどの話柄もあらんかと、かねて想像せしハイヲの心には、いかにこの日のかなしく、いかにこの大家の冷や

かなりしぞ。ゲエテは創意あり實力あるものを忌むとは、恐くはハイヲがひがみより出でたる激語なるべけれど、ゲエテは敢て他人を酷評することを好まざりしごとくに、自らも亦他人より酷評せらるゝことを好まざりしならん。ゲエテは女友のかた反て多かりしとかや。ハイヲ記して曰く、彼は曾てレダ、ユウロオパ、ダナエ、セメレエ、及び其他多くの美人に接吻せしと同じ唇にて、今われを見て微笑したりと。

三

「ヘレスポンド」を泳ぎ渡りてヘロオの君の許に通ひしレアンダの物語は、マアロオの筆に捕へられてかの伊勢物語などに見られまじき情なり。世にはたへがたき戀をする人もあるかな。'Adieu, adieu! my native shore' の歌をうたひて故郷を出奔せしバイ

ロンが、興に乘じて昂然として「セストス」の岸頭に立ちし姿やいかなるべき。戀なればこそこの岸よりかの岸まで泳ぎ渡らで措くまじきレアンダこそあはれなれ。バイロンが「サルセットフライゲエト」よりヘンリイ、ヅルウリイといへる友に當てたる短かき書簡は、一世一代の諧謔とも見るべきものにして、書簡の日付は千八百十年五月の三日なり。この地ならばまだ龜井戸の藤の花のさきそめて、袷の更衣も早き頃なるを、その文、この朝われは「セストス」より「アビドス」に泳げり。さしわたしの距離僅かに一マイルほどなれど潮流の急なれば危うし。いかにレアンダの切なる愛情なればとて、かれが樂園の通ひ路に少しの寒さも覺ねざりしとは、いと〳〵疑はし。われ一週間ほど前に試みしが、折しも北風吹きて潮流の高かりければ、水泳のわざには小兒の頃より人に劣らざりしわれなれど

遂に果さゞりき。けさ、波もいと靜かなりければ、さしも「廣きへレスポンド」なれど、われは一時十分の間に泳ぎ越えたりと。

四

若きフェイは樂人なり。獨逸に留學して音樂を學ぶのかたはら、いみじき書簡をつゞりて一冊の日誌を成せり。或はベートオヘンのC minorを學び得て其音調の美なるにおどろける思ひを記し、或はバッハの情樂をきゝてこれに比すべきものなきよしを記せり。たま〳〵ワグネルが彈奏に會す。憐むべし紛紛たる浮巷の評、"He seems to me a great genius." おどろくべき前額をそなへて、一見直ちに最も神經質の人物なることを思はしむれど、われはワグネルに鐵石の意志動かすべからざるもの

を看取せりなど、フェイの文は明晰なるうちに深くも同情を寄せて、「未來の藝術」の張本人を評せるさまおもしろく、して「ワイマル」に遊びゲエテが趣味によりて成りし「イルム」河畔の遊園に逍遙せしくだりフェイの得意思ふにあまりあり。ラスキンは山嶽を以て自然の活動となし、草野を以て其靜息となせり。靜和なるかな「イルム」河畔遊園の消息。フェイこゝに來りて、ゲエテが趣味の粹なるは「アート」と言はんより寧ろ自然をこの遊園に賦與したりと言へり。心地よき牧場を歩むかと思はるゝこの園には、或は綠蔭の鬱蒼たるところあり、あるひは流れに添ふて樹木の生ひ茂れるあり、或は日をあふぎ、或は影に入り、こゝかしこに深き休息の所を設けたりといふ。これ一幅の畫圖、ゲエテが詩中を歩むの心地もせずや。

五

客あり、ルウソオの自然を問ふ。モオレエ答へて曰く、ルウソウが自然に對せし特殊なる感情を按ずるに、「ル、シャアメテ」に於て殊にいちじるく彼れが性情を感化せりといふ自然は、下て近世の文學に顯はるゝごとき激烈噪暴なる痕を見ず。最も恐るべき自然の急調をかき起して、社會と宗教との上に對する大革命の用に供せしことは、ルウソオもとより其張本人の一人たることを辭する能はず。隨て彼が選べる自然の側面はこの位置を說明するにあまりあるものなれど、彼は譬へば「マンフレッド」の詩人が捕へ來りておのが社會に對する謀反の慰藉となせしものと、甚だ異なれる自然を觀せしなり。ルウソオが最も自然を愛せしは、其靜和なる側面にあり。彼は大

河よりも小流を擇ぶ。彼は大海を觀るに堪へず、汪茫たる海濤、をやみなき波瀾のものぐるはしさは、彼に沈鬱を加へしむるのみ。遊園の舊跡を訪るゝは、古城をたづぬるにも增して彼を動かし、いかにうるはしき草野といへども、彼はむしろ溪流、巖石、深潭、丘陵のかたを撰べり。かの橫暴なる革命家が好めるごとき畏るべき自然、かの近世の人心を傾倒せし「アルバイン」の懸瀑、これ彼には何の思ひを寄すべきにもあらざりし。ルウソオは眞に大なる美術家なり。試みに彼と逍遙を共にせよ。彼はかく思へり、美は必ずしも大なる舞臺を要するものならず、要は調和を得るにあるのみ。「ユラ」の岡高からず、「シャムブル」の谷さびしとはいへども、われらに快樂を與へてあまりあるにあらずやと。げに人は其時代より逸し去るあたはず、少なくも自然に對し恐怖を缺ける點に於ては、

ルウソオ純乎たる十八世紀の人なり。自然は優和なる胸襟を有する良友にして、恐るべき隱語をもたらす女面獅身の怪獸にはあらず。彼が自然に對するや、あへて恐怖を感せず、人間の微小なることを感せず、人生の繁雜を感せず、人を弄するごとき魔力を感せず、彼はたゞ其情を樂ましむる爲に自然を慕ひ、其思ひを紓ぶるが爲に彼女を愛し、溪流に石を投じて浮きつ沈みつ流れ行くを見るが如き樂みを好めり。其樂みやさゝやかに、其冥想やさゝやかに、其感情やさゝやかに、殆ど彼や一の小兒たるに似たりと、客即ち叩頭して去る。

六

其題を言へば戀、其情を言へば戀、近世の詩人ロセッチはあだかも無數の小星の空にきらめくが如くに、戀のあはれを幾

多の「ソンネット」に歌ひつくせり。花にそへて人を戀ひ、草をそぼちて君を待ち、空に聲なきもいかで君の聲をきかざらめや、君いまさずとも其花の如き唇のあゝわが熱き唇に觸るぞうれしき、目は目にかたり、心は心にかたる、吾戀は青楊かげ深きところ君と共に歩むの夢、吾戀は流水聲かすかなるところ君と共に語るの夢、わが戀は君小兒のごとくにして吾手に抱かるゝの夢、わが戀は熱き涙の流れそひて君がかんばせをうるほすの夢、'Without her? Tears, ah me! for loves good grace,' 君がやはらかき髪の毛は吾が涙にぬれ亂れて、草土手の花をもうるほさんとは歌へり。われ思ふにロセッチが「ソンネット」の情は熱くして切なり。其の情の温かにして其調の更にゆるやかなるは、わが常に好めるボッカシオの戀の歌のかたまされりと覺し。もとより英譯にして原歌の餘韻を失へるふしもあるべ

けれど　香もらせたる蓮の花をかゞのたゞひにはゆらそるゝ

Of all I want or wish possest,
Which of us here should sing but I?
Come, genthe cupid, heavenly guest,
The constant source of all my joy!

And teach my late desponding lyre
No more in plaintive note to mourn,
But mirth and am'rous joy inspire,
Whilst in your pleasing flames I burn.

You first before my eyes have placed
An ardent lover, gay and young;

With every manly virtue graced,
And soft persuasion on his tongue.

But what crowns all my hope is this,
Our hearts and wishes fondly join;
That mutual and the same our bliss,
His love sincere, and fix'd as mine.

Cupid, 'tis to your gift I owe
That in thir world I'm amply blest;
May Heav'n, in whom I trust, bestow
In that to come eternal rest!

七

ルナンのこゝろこそ優しけれ。考ふれば迷ひ、迷へば疑ひ、疑惑潮の如くに湧き出でゝ念頭に襲ひ來る時、女性の心には の見ゆるかの善と美との自然なる確執は、語らずしてわれら を樂しなしめ、言はずしてわれらの疑惑を解く。これ彼が追 想錄中に記するところなり。ルナンまた語をつぎて曰く、こ れ則ち宗教が獨り女性によりて世界に維持さるゝ所以ならず や。優美にして淑雅なる女性は、われらが道德上の沙漠を變 じて甘泉青草を生せしむるなり。近世の科學の進めるは類別 の進めるのみ。化學は化學を產み、代數代數を產み、產むこ といよ〳〵多くして自然に遠ざかることといよ〳〵酷だし。こ れもとよりかくあるべきのことにして、あへて恐るゝに足ら

ざるのみか、かゝる無慈悲なる解剖より最も味ひある生命も 生まるべきなり。術もなき可憐のものより煩熱の愈さるゝを 怪しみたまふなかれ。自然は女性の心に宿りて、こゝに微笑 をもらすにあらずやと。人はルナンを見て女性崇拜となした まふか、寛容なる彼が心は女性崇拜といはるゝことをさまた げじ。人は基督傳の著者を見て宗教をなみせりとしたまふか、 はた宗教を捨たりとなしたまふか、優和なる彼が情緒は宗教 を捨てたりといはるゝをさまたげじ、また宗教を拾へりとい はるゝをさまたげじ。

木曾谿日記

はしがき

なくて七癖とはよく世間にもいふ通り、自分はほんのありふれたことをもしろがり些細なことに得意がる癖がある。よろしく人の癖は笑つてやれ、自分の癖はまた笑つて貰うといふのも、いつそ興のあることではなかろうか。仙臺に居たころ、廣瀬川の眺めあるほとりに、もと酒屋の隱宅につくつたといふ一軒建の空屋があつた。都をはなれ友に別れて、草の枕を重ねた旅の身には、せめては住心地のよい家を借りて、氣を落ちつけてみたいといふ心が起つたので、友人の池雪に

相談すると、池雪も大賛成。いろ〳〵掛合つて見ると、あゝして明けて置きましたところが、仕方がございませんから、それぢやお貸し申しませう、と話がまとまつて、酒屋のおかみさんや、娘がきて、掃くやら拭くやらして呉れたあとへ、池雪の家族と自分とか引越した。もと〳〵隠宅のつくりで、押入の少ないのと、新しい唐紙に名も知れぬ畫工の山水を帖りつけてあるのが疵であつたが、からつとして、障子を明ければすぐに河といふ家の位置であるから、客があると何もあいそのないかはりに、まづ障子を明けて見せるのが、自分の得意であつた。

たま〳〵話をしても知り合はぬ仲では氣心を疑はれて、土地自慢な考に敬して遠ざけられることが多い旅の身には、池雪のこゝろやすだてが自分にうれしかつた。池雪は善良な、孝心の深い、情の厚い畫工で、男らしいおもばせと、滑稽をいふ口元と、長く黒い髪の毛とは、ことさら若い美術家にふきわしい、池雪のきさくな、こゝろをきのないつきあいから、互に詩や畫の上の物語がこの上もない二人の樂みであつた。せちがらい世帶の上の苦勞で池雪が心をなやましてゐるときには、自分はラスキンの畫家論などを取出して、西洋の名人の噂さに其心を慰めてみたり、また自分が旅のさびしさ苦しさに愚痴をならべはじめると、詩人シェレイの姿を摸寫した大板の「チョオク」畫をつくつて、自分の氣を引き立てゝ呉れた。池雪も自分も文藝の上にはちよち〳〵あわゝの小兒に過ぎない。鬼さんござれ手の鳴る方に戯れてゐる心の若い同志だ。若いから話が合う、話が合うからおもしろい。丁度池雪も筆をさめて、シェレイの水もしたゝる姿が出來上つたので、そ

れを自分の好みで黒椽の額のなかに入れて見た。趣はやゝ古畫の風に近いが、なか〳〵澁い出來であつた。旅にきて斯うゆう友と朝夕膝を交へてゐたのが、これも得意の一つであつた。

仙臺で眺めのあるのは、ことに秋だ、とりわけて空のながめが麗しい。氣候が不順で、海邊に近いところであるから、雲の變化の多いことは、とても都の空に比べられない。秋の日の花やかにさすとき、黄な雲の風に吹かれて青空に消えて行く風情は、得も言はれぬおもむきがある。十月の末には秋風が赤くあつた柿の樹の葉を吹いて、庭に栗の落つる音もおもしろい。東北の秋色、これも擅まゝに樂む自分の身には、また得意の一つであつた。

三拍子揃うといふことは稀なのに、まして些細なことを得

意がる自分は、たとへば下戸の甘いものを手に入れたかのやうに、藏書家の珍本を堀出したかのやうであつた。十月の二十四日はことに空が澄み渡つて天高く風すゞしい秋の日であつた。丁度D氏といふ人が誘ひにきて、一緒に散歩に出掛けた。途々自分は今の得意を思ひ出して、想像の色をつけて、柿の黄になつて熟してゐる樹影や、紅葉(もみぢ)してゐる雜木の間の畠道を歩いて、むかしからさびしいといふ秋のうちに樂しい趣の多いことを考へて、しかも其樂みは春の夜のやうに夢ばかりのあわたゞしさでなくて、靜かなものだと思ひながら、ぶら〳〵行くうちに廣瀨川の岸へ出た。

廣瀨川は清く仙臺の町はづれを流れて、秋は深く瀨々にうつる明暮の眺め、川のほとりに宿屋兼帶のいつそのんきな田舍氣質な茶屋は一見亭である。紅葉をさぐりにきて、足を休め

たのはこゝだ、一見亭の二階の八疊だ。

たま〳〵の酒の上はお互、遠慮しつこなし、くづしたまへ、胡座にしたまへなどいつてゐたのが、友は見かけ程もなく二三盃の下りに酔つてしまつた。下りといつても實は地酒、地酒といつても色は茶のやうである、友は横になつて酒の香を吐いてゐたが、欄干に倚つて廣瀬川の秋を眺めた。

にはかに部屋の障子が明るくなる、あゝ今秋の日が暮れるのであつた。花やかな夕日の光が山から山へさし照して、秋の葉の黄ばんでゐるのは、紅くなり、紅いのは紫となつた。川の向岸に牛の動いてゐるのは、日暮れて牧場に歸つて行くのであらう。茶屋のおもてのがや〴〵として、ちやら〳〵馬の鈴音もきこえるのは、今多勢がつゝいた様子。勘定を濟まして階子段を下りると、庭の隅にきり〴〵すの鳴く音も聞える。

「近頃にない氣休めをしたねね。」

と道草を食ふ小供のやうにぶら〴〵話しながら支倉(はせくら)の家の前へくると、夕闇のおぼつかなさ、別れを告げた友の顔の卷煙草の光に照らされたのが見へた。「おや、お歸り、東京から電信がまいりましたよ、」と下女のさしだすのを受取つて、とりいそいで開いて見た。

ハヽ、ビヤウキスグコイ

たゞ病氣とばかりで樣子も知れないが、おそらくは尋常のことでなからう、なにはともあれ今夜(こよひ)のうちに出掛ずばなるまい。母はまめ〳〵とした、肥つた、働きずきな、ささくなたちで、その姿が目の前に浮ぶから、年よりの事とは言ひながら枕についたと思はれない。

生憎池雪は寫生のために二三十里もあるところへ牧畜家と一

緒に出掛けて行つたあとであるから。遇つて留守の間のことを頼んでゆくせきがない。もしこの場に居たならば、どんなにその親切な心を傷めてくれたろう、どんなにいろ〳〵な手つきをして電信の文面を想像してくれたろう、どんなに自身の母の病氣に思合せてその動き易い眉を動かしたことだろう。「おつかさんが御病氣だつていふぢやありなせんか」といつて自分の部屋にはいつてきたのは池雪の母親であつた。池雪の母親といふのは、久しく肺をわずらつて、このごろはお蔭樣でそれでも大きによろしひ方ですと言つてゐるもの〻、瘠せぎすな、つ〻しみ深い、口の重ひ人で、見るもの聞くもの哀みの種となつてゐるのだ。「ズック」の革袋をだして、自分が手荷物をこしらへてゐるところを、池雪の母親は見守つて無言であつた。女ご〻ろに吾子の上を氣遣つて、二三日の留守に

も夜は殊更もの寂しい矢先、わが母の病氣と聞いたので、碌々言葉も得言はない。

がたりと唐紙につきあたつて、それを引明けたのは下女だ。

「あなた、車がまいりました。」

雪洞をつけてあがりはな迄送りに出てきて呉れたのは池雪のおばあさんで、外した釣らんぷを右の手にもつてきたのは池雪の母親であつた。雪洞の蠟燭の火が虫に消されたので、格子戸の外まで釣らんぷを差出して呉れたが、車に乗つて停車場に向ふときは、夜風がいとゞ身にしみた。

十二時四十分の夜滊車に乗つて、自分はいろ〳〵な想像を胸に畫きながら仙臺を出發した。乗り合せた客は大抵眠つてしまつて、革袋を枕に横になる和尚もあれば、帽子を落して知らない商人體の男もある。自分ばかりは眠られない。腰掛に

倚りかゝつて秋の夜の夢も見ず、卷煙草を何本か燻して、白毛布にくるまつてゐた。今まで廣瀬川のほとりに閑靜な家を借りて、池雪と一緒に世帶を持つたことを、獨り旅の身におもしろがつてゐたものが、にはかにあはてふためひて夜滊車に物を思ふ身になるとは、かくもまた自分の得意のもろくも變るものか。自分の心は玻璃の小窓に譬へて見やう、少しの氣息を吹きかけると、山も川も曇つてしまつて殘らず見ゐなくなる。

すこし滊車のなかで寢て行かうと思へば、かへつて眼がさゐて、列車の響、滊關車の笛の音に驚かされて、かれこれするうちに夜が明けた。がた〳〵起上る客もあれば、そこ〳〵でよもやまの話も始まる。隣に腰かけてゐた和尚は、世を憚からぬ顏で、衣の裾から「ストック」の罎を取出して、口うつしに

がぶ〳〵心を濁してゐた。

東京から名古屋へ下ると、仙臺から東京へ上るとは、殆ど滊車の時間が同じて。表の通りならば一時頃は上野へ着くべきだが、三十分ほど遲かつた。「チッキ」で小荷物を受取つて車を飛ばして本郷の姉の家へ駈けつけると、門に巡査が立つてゐた。

車から下りると、巡査はついと自分き避けてわきへ行つた。あとで考へて見れば、それと察して氣を利かして呉れたのであつた。

「おゝ、おかへりですか、家へはいれませんよ。」

と、いきなり姉に聲をかけられて、自分は不意を打たれた。沈着をつくつて見たが、ぶる〳〵と震へて格子の外にたゝずんでゐた。

姉の家は一週間の交通遮斷。風もひいやりとするこの秋になつて、東京のこゝかしこに劇烈な虎列拉病が流行した。ことに清潔好な、すこやかな母が、日頃敵ほどに忌み懼れる流行病に罹つて、わづかに一晝夜の間の苦みで事畢つたとの姉の話。本所の避病院へ行けば、せめて死顏だけは見らるゝであろう、なにはともあれその手荷物をちよいとお隣の大屋さんへ預けてくるがよかろうと、心づけられて、自分は白毛布と「ズック」の革袋をさげて勝手口の木戸から隣へ頼みにいつた。いろ〳〵世話になつた禮から、近所までも迷惑をかけて心苦しいことを細君にかたると、細君も襷を外しながら、すこし周章て、手荷物を預かつてくれた。見る人ごとに周章てゐるやうに思はれるのは、自分があまりの不意に驚いて、思いがけない有樣に心の恒を失つたからであらう。度胸のきちんと

きまつてゐる人でさへ、かうゆうわけで母をうしなつては、日頃の靜かな心掛もむだになるためしは有るであろうを、ましてや自分のやうな輕薄な、無益しきことに驚き易いものには、この周章てたありさまはをかしい哀しい譯なのだ。びつしやり隣の木戸をしめて、立出ると、お向ふの文學士の家の女が手桶をさげてくるのに逢つた、これも、けゞんな顏をして、周章てゐるやうに見えた。

子が親に別れ、僕が主人に別れ、弟子が師匠に別れる時のくることは、世間を見るにあたりまへな話で、めい〳〵一本立になつて、やつて行く時のくるのも、ひき別れた親や、主人や、師匠の影法師のやうに消えて行く時のくるのも、自然なことだ。獅子をかぶつて舞つてゐた子が、いつしか親父ぶつて笛を吹く時もくる、上下三百文と流してあるく弟子が、い

つしか紋付の羽織を着て療治に出掛ける時もくる。とはいふものゝ、よもやこんな周章てた心で、自分は母に別れやうと思はなかつた。

母は十八の年に吾家へ縁付いて、一生處女のやうな快活な心であつたと、いつでも人に言はれる。情の深い、涙もろいたちではあつたが、泣いたあとは直に心の空が晴れて、沈み勝な嫂を慰めて、立働くのを樂みにしてゐた。自分の心が情の波にゆられて、鷗のやうに水に落ちる時でも、明星ほどの光の身に添はない時でも、母に慰められ、勵されて、いつでも藝術を慕ふ心に立ち歸つた。

かう途々車の上で考へながら、自分は本所の避病院へ出掛けた。受付へ名刺を差出すと、やゝ、ちばらくして小使の案内があつた。庭の植樹の間をぬけて、石炭酸くさい蒲團のいくつ

か乾してある側道から死亡室へ廻つて行つた。思はず足早に歩いて、室ごとに掲げてある名札を讀むと、母の名が黑塗の木札に白く書いてある。身體は殘らず白の晒で卷いて、顏だけが顯れてゐた。これは誰かの間違であるまいか、それでも母とは受取れない位に面痩がして、たゞ自分の心覺には左の眼の上に黑い痣のあつたので、漸く母かと思ふほど病のために容貌が變つてゐた。噫、笑ひもし泣きもしたのはきのふのことのやうに思はれるのを、なんの心仕度もする暇がなくて僅か一晝夜のうちに冷たい石となつて去まつた。秋の日は寂しく廂の板の間からさしこんで、蒼ざめた母の顏を照らしてゐた。最早呼んでも受答へをする口唇ではない。

其夜病院の裏門から砂村の火葬場へ母のなきがらを送ることになつたので、闇を照らしてゆく提灯のあとについて、自分

は火葬場で火を入れるところまで見て歸つた。

木曾谿の日記をつけたのも外ではない、母の遺骨を携へて、父の墓のほとりへ葬むるためにうまれ故郷の空へ歸ることになつたのだ。自分は故郷を出でゝから十七年目になる。頑是ない時分に都へ上つたまゝであるから、殆ど覺えもないほどなおぼつかない道をたどつて、久しぶりで木曾の古里にかへる。

十月三十一日

空飛ぶ鳥にふるさとの花の影を尋ねるまでもなく、誰もその故郷を慕はぬといふものはなかろう。殊にうら若いものゝ身として故郷の空を慕はぬといふものはあるまい。たとへば今日文藝にこゝろざすものゝ故郷はと問はゞ、無論東京と答へる。東京は明治の美術の天だ。畫工もこゝから出て、詩人もこゝより生れる。たまさか旅の身の遠い海邊の潮の音に都の空を眺めるときは、どんなに東京の風俗の慕はしく、どんなに東京の言語の慕はしかろう。それと同じことで、信濃柿の紫に、木曾川の水の藍色深いかなた、古里といひ故郷といふ

字の音までが、なにとなく自分の耳にはなつかしい。

これから木曾路にかゝると、案内の男が提灯の光に夜道の闇を照しながら、自分の方を向いて足許に氣をつけてくれたとき、頑是ないころ都に上つたまゝで地理も風俗も青波を隔てて海草をうかゞふほど僅かばかり記憶のうちに殘つてゐる自分の古里はどんな有樣になつてゐるであろうか、幼な馴染はどんな有樣に變つてゐるであろうかと、頑是ないころのよろこび、かなしみが畫のやうに眼の前に浮びいでゝ、こよひほど懷かしく過し昔を思ひだしたためしはなかつた。

「提灯がすこし暗くなつたね。」

「へい、蠟燭を買つて參ればよろしうございました。」

「石ころ澤山の山坂で、おまけに眞闇な夜道だからたまらない。おまへさんも荷物と提灯と兩方ぢややりきれまい。提灯はわ

たしが持たう。」

「なにそれには及びません。」

「まあいゝから、こつらへお出しよ。」

案内の男から提灯を受取つて、「時に、何時になるだろう、」と自分は兵兒帶の間から懷中時計を出して、提灯の光に透して見ると、八時過であつた。丁度中津川の村端れにさしかゝるとき、案内の男の注意でお忠さんはもとこの中津川の生れで、久しいこと自分の鄕里の馬籠へきてゐた。自分の家の隣に小島崎と屋號をつけた別家があつて、そこを借りて小間物を商つてゐた。自分の幼ないころには、このお忠さんの膝に乘つて、圍爐裏の火にあたりながら、さま〳〵のおさなものがたりを聞くのを樂みにしてゐたのだ。國盡しの淸書に佳々なぞゝ先生の朱字を頂い

てそれをこのお忠さんに見せるのが樂みであつたのだ。裏の小川へ魚をすくひに行く時、手網をこしらへてくれたのも、榎の實の落ちたのを拾ひに行く時、小笊を供へて置いてくれたのも、このお忠さんだ。「ごめんなさい、」と潛戸をあけて音れたとき、お忠さんはおろ〳〵と老の涙にくれてゐた。幼ないときと同じやうに、ほんの六つか七つの小供のやうに自分を取扱つて、錫の小匕で菓子皿の金米糖をすくひながらおてをと言はぬばかりに自分に呉れて、「東京からいらしつちや御馳走も何もありませんけれど、今夜はまあゆつくり話していつて貰ひましよ。」といふのを、押して辭退して、「いゝえ、さうしちやゐられない。名古屋から電報をうつて置いたから、馬籠には姉がきて待つてゐる筈、」といへば、「おゝ、そんならさうなさるがいゝ、どうせ明日は馬籠でおめにかゝりませう

から、」と、お忠さんは手ばしこく提灯の蠟燭を新しいのにさしかへて、氣を利かしてマッチまで添へてくれた。

落合といふ村を過ぎて、自分と案内の男とは既に山坂をいくつか越してきた。二人の今歩む道は餘程の高地であるやうに感ぜられた。筆のついで、かいつまんだ地形を記して見るなら、木曾は御嶽の大山脈と駒嶽山脈との間に狹まれてゐる谷で、御嶽山脈の麓を流れてゐるのが木曾川である。木曾の村々はみなこの木曾川の流れに沿ふて連續してゐるのだ。丁度自分の古里の馬籠はこの山脈のはづれに當つてゐて、その起伏した山々が六曲峠を終として美濃の沃野に落ちてゐる。わづか中津川村より二里と聞いた道程が、山坂のせいか餘程あるやうに思はれて、馬籠の村はづれへ着いたのは夜の十時過であつた。あゝ草臥たから一と休しませうと、案内の男は道

ばたの石に腰かけて、すぱ〳〵煙草をふかしてゐた。自分も卷煙草が燻したくなつたので、火を借りると、この男が手の掌の上へ眞赤な吸殻をのせて、ころ〳〵させながら口をすぼめて吹いてくれた。このあたりの平らな大岩の上で、自分はよく遊び戯れた昔のことを思ひだして、岩のはなまで行つて見ると、暗の夜のこゝろもとなさ、山も草木も目に見ゐる色がない。

坂の向ふより提灯片手に喜代さんといふこの村の巾利で自分の親戚にあたる人が、迎へにきてくれた。實は昨年の冬、この馬籠に大火があつて、全村殆どその災に罹つたので、大抵の家は假普請のまゝであるから、このたびの葬儀のためにわざ〳〵遠い村から出掛けてきてくれる親戚などを請ずべき好都合なところもない。廣間のあるのは燒殘つた永昌寺といふ

寺ばかり。喜代さんの計らひで、この寺を借りて萬事の埒を明けることにして、親戚もみな待ちうけてゐるとのことであつた。

村のなかほどより寺へ曲るところに、自分を待合せてゐる人々がゐた。闇ながら姉の聲が自分には第一に聞えたので、思はず足早に歩いてそこにゐた人々に挨拶すると、いろ〳〵親切な吊辭をうけた。自分の眞身の兄ほどに思つてゐる姉の夫は、馬籠より十三里ばかりさきの福島に奇應丸といふ名高い藥を商ふ人で、苗字を呼ぶより奇應丸といへば通りが早い。この兄の奇應丸も姪と一緒にわざ〳〵葬儀に出掛けてきてくれて、このたびのことは一切奇應丸の主となつた計らひであるのだ。自分等はつれだつて霜枯の草を蹈んで永昌寺への細道へ曲つた。

自分の姉弟のうちで、すぐれて感情の深いのはこの姉で、また感情の美しいのもこの姉である。今は故人となつた父も矢張姉と同じやうな性質を供へてゐたかはりに、やがてその情の火が烈しい性格を燒きつくして、かへつておのれの情のために自ら苦しみ自ら病を作るほどであつたが、姉は父の性情のよきかたを享けたものと見え、その情は花やかにやわらかい。女の情には花ともならず、色をも染めず、空しい涙となつて零つるのがある。頭ごなしに愚痴とけなして了ふのは、男の舌の鋭い證據になるばかりでなく、言葉も寫すことの出來ない思を胸に浮べて、やがてそれを言ひ出せば自身の耳にさへ愚痴としか聞えないのがある。男の見る夢は爛々たる火のやうだ。女の見る夢は春の夜の朧にかすかなるおもむきがある。母の亡くなつたこと、久しぶりで自分と顔を合せたこ

となどで、姉は胸のうちを寫す言葉もないかのやうに、姪に助けられながら寺へ行く道々袖を霑してゐた。

盥のぬるま湯に足を洗つて、永昌寺の奥の十疊へ案内された時は、自分も旅のつかれを休めるせきがなかつた。親戚舊知の人々にかはる〴〵くやみを受けて見れば、自分の幼ないころの友達はみな立派な旦那樣になつて、小學校にゐたころの女友達もみな母親になつてゐた。自分の故郷はことに緣結びをするのが早いので、娘は十五六になれば齒を染め眉を落して、それ〳〵堅い夫に緣付いてゐる。わが古里とは言ひながら、自分は殆ど幼な馴染の人々の俤をも記憶しない位であつた。

寺はことさら靜かなこよひ、大火鉢の灰をかきならして、さま〴〵の物語をした。この夜は一同で永昌寺の廣間に泊る。

十一月一日

風雅でもなく洒落でもなく、きのふのやうに思ひのまゝを記して見れば、ありのまゝなことを記すほど筆に勿體がつくやうに思はれる。おそらくはいかに考への深い人でも依怙な沙汰のないものは世間になからう。他人の身の上でも記すやうに、なんの矛盾もなく、過失もなく、すら〳〵と我身の上を書き流すことが出來るであろうか。そのむかしみちのくの旅に風雅のさびしさを尋ねて、古人も多く旅に死すと奥の細道を記した俳士の上などには、矛盾らしいこと、滑稽らしいこと、過失らしいことを演たためしはないのであろうか。自分の日記を作るに何のつゝみかくしがいろう。凡夫のあさましさ、我身の上はそんな立派な、無疵なものぢやない。依怙な

われぼめな、矛盾なさまを寫さねば自分の日記にはならないのだ。いつそありのまゝな矛盾でやれ。

海邊に生れた人を自分は羨ましく思ふ。慾には青々とした海のほとりに生れて、母の乳房にすがるころより耳に潮の音を聞く身になつて見たい。よし身はいやしい漁夫の家に生れて、色は潮のために落栗の皮のやうに見ゆるにもせも、朝は朝の聲を聞き夕べは夕べの色を見て、胸は海の汐に染み、心は波の岩に碎けて、まことに自然の聲を味ふ身となつて見たい。

葬儀の仕度をしてゐるうちに、小人多忙にして反つてこんなことを思ひ起した。あらましの用意も整ひ、かねての通知もあつたことゆへ、わざゝゝ遠い村より會葬に集つた人々も見ゐる。中津川のお忠さんも來た。家例によれば神葬式で、今度母を葬るについては全村の火災後葬儀をすべき場所もない

ので、餘儀なく寺を借りて式を行ふことにした。彼是してゐるうちに禰宜も見ゐる。この禰宜は自分と一緒に小學校へ通つた幼な馴染で、この寺の住職も矢張いたづらをして遊んだ仲間である。あなりおかしいので、姉は泣くあとから笑ひころげて、いそがしく立働いてゐた。

すこしの間、客を避けて、自分は障子をあけて椽へ出た。姪は欄干によりかゝつて、獨りで庭の菊の花を見てゐる。鼠縮緬の晴衣に小紋の下着を重ね、一つ紋は花菱、髪のすがたも都の風をうつして、葬儀の式にゆく用意を整へてゐた。菊は住職の丹精で、かゝる山家にめづらしいほどの色を見せ、日の光は本堂の屋根の影を花畠のうへにうつしてゐた。

午後一時ごろより式が始まつた。禰宜は濃紫の直衣に古風な烏帽子をかぶつて、ぽん〳〵と拍手をうちはじめた。思ふに

葬儀で簡單なのは神葬式、次には耶蘇式、すぐれて儀式の盛なのは佛葬であろう。神葬式には耶蘇式のやうに哀歌を唱へることもなく、佛式ほどの讀經をするでもない。靈前の供物は平常身を養ふべきものゝかず〴〵、常盤樹の葉に白紙を切りさげて、なにとなく古代の風を目の前に見る心地がする。

第一、禮拜のさまが最も古風で、質樸である。次に吊辭の文が嚴めしい古典の型に隨つてゐるから、他界のことや宗教的なおもひを起させることの少ない割合に、いとゞいがめしく質樸に聞ゐる。この時に禰宜が清しい聲で讀みあげた文章は餘程苦心を凝して作つたものであつて、姉や姪などはひた泣きに泣きむせんでゐた。

母の遺骨はこの永昌寺の境内で、父の墓の側へ埋めた。墓地はすこし小高いところにあつて、杉の樹の蔭から馬籠の家々

の屋根が見ゆる。境内にはところまんだら笹龍膽の花がさいてゐて、野菊の萎れてゐるさまもあはれであつた。

きみがはかばに
きゞくあり
きみがはかばに
さかきあり

くさはにつゆは
しげくして
おもからずやは
そのしるし

いつかねむりを
さめいでゝ
いつかへりこむ
わがはゝよ

あからひくこも
ますらをも
みなちりひぢと
なるものを

あゝさめたまふ
ことなかれ
あゝかへりくる

ことなかれ

はるははなさき
はなちりて
きみのはかばに
かゝるとも

なつはみだるゝ
ほたるびの
きみのはかばに
とべるとも

あきはさみしき

あきさめの
きみのはかばに
そゝぐとも

ふゆはましろに
ゆきじもの
きみのはかばに
こほるとも

とはきねむりの
ゆめまくら
おそるゝなかれ
わがはゝよ

十一月二日

きのふの勞れに奇應丸も姉も横になつて、懷舊の物語を始めてゐたが、自分は寺のうちをそこ〳〵と歩いて、古風な建築のさま、佛壇の裝飾、威嚴ある木像の彫刻などを見て、素人考にいろ〳〵と寺院の建築などのうつりかはりを考へて見た。やがて獨りで村のさまを見に出た。

京の着仆れ、大阪の食仆れとは、俗にも一口に言ふことであるが、總じて京大阪にかぎらず、衣服食物の上に心を注ぐほど深くは家屋建築などに注意しない。今日の風俗として、身のまわりのもの、たとへば四季の衣服はいふまでもなく、髪の結ひ樣、帽子の形、煙草入、下駄などには常に流行の好め

があつて、隨つて意匠もめづらしく趣味も進んで行くやうに思はれるが、家屋建築の上にはそれほどの流行もなく、好みといふものも少ない。つまりは水都合のよしあし、買物の便不便、建方なんぞよりは一間でも廣い方が割だといふところに落ちる。今日の趣味は、室内の莊飾、床の間の置物などに傾いて、反つて家屋の構成、屋根の形、窓の姿、柱の位置などには深く心をとゞめない。普通の家屋は大抵簡單な直線の式で、まるみのある線を用ゐたところは實に稀だ。自分の古里のやうな山家までもこの趣味が感化を及ぼしてゐる。家屋のさまといひ、生活の姿といひ、山家には畫中の趣があるので、住む人にもまた景色のやうな無心なものと思ふのは、日暮れて宿を急ぐ旅人がほんの素通の手帳に記してあることだ。こまかに觀察してみれば、山家の生涯とてそんな無心な

景色のやうなものではない。見かけは壽中の材にとられて、草木のなかに寫されるほどな人々も、裏には煩惱、愛着、鬪爭の世界を作つてゐる。とはいふものゝ、さすがに山家は山家だ。都ならば戸締を堅くして、鑰をかけて、しんばりをかつて、すこし小金でも溜めてゐる人は鼠の音にも刎起きて見廻るほど用心を深くする。そこへ行くと山家は狹い。善につけ惡につけ、すべてのことが直に知れる、直に知れるから小盗はあつても大盗なしといふ有樣で、夏は多く戸を締めないで寢る。筆のついでに、このあたりの若い人々の上を記して置かう。夕暮からかけて夜は若いものゝ世界になつてゐるのだ。農家のものは朝早く一家こぞつて畠に出て、日の光に顏を照されながら、一日汗びつしよりに立働く。大人ならば、麥を背負ひ、馬を引ひて歸つてきて、鋤、鎌も洗ひ、足もす

すいで、熱燗の濁酒に酔がまわれば勞れも忘れてころりと横になる。若いものはそれでは承知しない。なんでも遊ばずにはゐられない。馬士唄の稽古も、祭の相談も、それから始まる。夕暮から娘も手ばしこくおしまひをして、新しい前掛の一枚もかけかへて、ちら〳〵あかりのつくころには遊びに出る。秋の夜を長いものとは、圍爐裏の側でやる臼挽歌の心意氣になつてゐるのだ。

自分はそここゝとあるいて、火災後の俄普請のさまなどを眺めてゐたが、ひきかへそうすると、畠にゐた二三人の小供がめづらしそうに自分の方を指して、笑つてゐた。

この日は一同で墓參りをした。午後三時ごろ自分等はそれぞれ會葬の禮や又た暇乞をして馬籠を立つた。妻籠には自分の年老いた叔父があるので、こよひは一同妻籠泊りときめて、

二里の山道をぽつ〳〵歩いて行つた。姉や姪などの女連があるので、道がはかどらない。始めのうちは快活な話をして、めい〳〵我を忘れて歩いてゐたが、次第に足が勞れる、話がなくなる、竟には互に無言で卷煙草ばかり燻かして行くやうになつた。

暮れかゝつたので、奇應丸も姉も姪もみなずん〴〵先へ行つて、自分ばかり取のこされた。まゝよ、ゆる〳〵木曾川へ注ぐ流に添ふて、蕭條とした夕暮のさまを見て靜かに妻籠へ下つた。

日もとつぷり暮れて叔父の家へ着いた。「おゝ、來たか、來たか、」と叔父はほく〳〵喜んで、「さぞ寒かつたろう、あんまり遲いもんだから、いま人を見せにやつたよ。まあ圍爐裏の火にでもあたれ。いや火燵の方がいゝかな。お風呂も沸いてるが先へ入るか、」といろゝゝ自分をもてなしてくれた。「今夜はゆつくり話してくれよ、飲んでくれよ。何かおまへの好なものを御馳走しよう、好なものといつたつて、こうした山家ではなんにも珍らしいものはないが、おまへのちいさい時分には木曾名物の御幣餅がすきだつけ、御幣餅がよかろう。小鳥の買つたのがあるから、あれも燒いて食はせたい。あゝ年が寄るとこう氣がせか〳〵するから困る。時にこの柿はどうだな。」

十一月三日

持統天皇のころ木曾街道を開くとある、その街道のことなぞは古くて尋ねるすべもないが、椎の花のこゝろを尋ねて一節一笠のわび姿で蕉門の詩人たちが通つたといふ道も、今は畠

となつて、道路も幾度か改なつてゐる。木曾路といつても、この妻籠からはなか〳〵よい道で、工事のよく行屆いてゐる具合は美濃路も及ばぬ程である。

けふは晝前に義理を濟してしまひたいと、自分はこの妻籠の親戚へ會葬のときの禮廻りに立寄つた。天長節の祝ひで軒ごとに日の丸の旗が出してある。寒さうな顏をして、豆絞の手拭に頰冠りをしながら、馬を牽いて行く群も見ゐる。日あたりのよいところへ藁席を敷いて、豆を乾してゐる婆さんの側に、厚ぼつたい半天を着た年寄が、日の光に背を曝して昔を夢に見てゐた。紫になつた信濃柿や、小鳥のきて鳴く雜木の影には、梭の音もきこゐる。

午後一時過に奇應丸夫婦と姪と自分の四人が妻籠を立つた。叔父は村はづれまで見送つてくれた。叔母は五六人の親戚と

一緒に牛が淵まで送りにきてくれた。こゝに吾妻橋といふのがあつて、この新しい橋の畔に休茶屋がある。一同はこの茶屋で一と休みして、さてこゝで互に別れの言葉をのべた。姉は自分の側へ寄添ふて、寒さうに震へて、なにか思ひ出して泪ぐんでゐた。女心にそれからそれへと氣を配つて、母のことを思ひ出す暇もすくなかつたのが、埋葬もすみ、叔母にも別れて、橋のたもとに名殘を惜まれて見れば、にはかにさみしいこゝろになつて、ばら〳〵と落ちる枯葉のさまを眺めてゐた。自分は一人乘を一臺雇つて、こよひの宿を定めて置いて、姉と姪とを先へ出發させた。

奇應丸は糸織の羽織に紺の絹股引をはいて、茶の山高をかぶつて、輕々とした身仕度であつた。これからは語も二人の話で、輿も二人の輿で、新しい草鞋の穿心地もよい。

牛が淵といふのは木曾の名所の一つだ。斷崖に上つて眺めると、大河滔々と流れて、藍のやうな青々とした河波がこの淵に巴のやうな絞を畫いてゐる。木曾川のながめの美しひのは染めたやうな青い河波と、白い大岩とが互に亂れ合つてゐるところにある。河の石はみな花崗岩で、水のあたるところは殊に純白な珠のやうだ。よしやいかにすぐれたる大才があつて、高邁な力を振つて自然の姿を大理石に彫り刻むとしても、この河波とこの大岩と青色白色相交つてゐるさまを見たならば、おそらくは彫刻の刀を捨てゝ自然の飛動してゐるのに驚くことであろう。

秋も暮れて、山々はさびしくなつた。自分等は河に添ふて。谷へ下り、坂を上り、いくつか小山の道を越ゑて、高いところから眺めると、紅葉のさまのうつくしさ、大海の波のやう

な山々は前へ落ち後へ延びて、右は黄、左は綠、手近いところは紅の色を染め、日の光のあざやかに深紫の雲間をもるゝありさま、あゝ實に深い自然の畫である。こゝに至つては人間のする事業がこの深大な天然にひき比べられやうか。さまざまな名目をつけて自分等にすることも、こうした深い自然の前に比べて見れば、ほんの小供の戯れのやうな心地がする。日頃色彩の大觀を慕つてゐる友人の畫工などに、この美しい景色を一目でも見せたい。日頃せちがらい世渡りにうら若い心をなやまして、讀書に神經を刺激して、おもしろくないで暮してゐる友人などに、この自然のさまを見せたなら、どんなに我を忘れて不平な胸を和げることだろう。

三留野を過ぎて、假名千谷といふところへきた。「あんまり景色がいゝぢやないか。どうだね、こゝらで一服やつては。」「よ

かろう、」と自分等は紅葉のちりかゝつた白い大石に腰をかけた。これまで見てきた木曾川のほとりで、この假名千谷ほど靜かな眺めはない。奇應丸も自分も微笑で、時のうつるのも忘れるばかりであつた。

「いつまでかうしても居られまい、」とこの假名千谷を後に見捨て、快活な話しに興じながら道をひろつた。行く〳〵自分はその靜かな眺めが目について、綠の常盤木のかげを通ふ渡し舟のさま、梔染のやうな山の端の黃葉などが、畫のやうに心のうちに浮んで、身につきまとふ影のやうに離れがたい心地がした。

假名千谷を出て羅天へくると、彼の趣は深く、是の眺めは奇だ。自分等の歩むところは殆ど楓ばかりで、風に吹かれてひら〳〵と落ちる紅葉が帽子の上や羽織の袖にちりかゝつてや

がて木曾川の流れに浮いて行く。ふと目の前に古い夏帽子が落ちてゐた。自分はこの古帽子を川へ投げ捨てると、生憎崖のなかほどの紅葉の枝に懸つた。奇應丸もいゝ年をして、自分と一緒にいたづら盛りの小兒のやうになつて、この古帽子へ小石を投げた。自分の石はどうしても當らない。奇應丸はまた丸い小石を拾つて、ひよいと投げると、古帽子は紅葉と一緒に木曾川へ落ちた。

奇應丸はこの勝利に高慢らしい風を粧つて、二人で大笑ひをしながら、壺天庵の月、興河の秋、柿園村の柿などの噂さをして、木曾川のほとりに添ふて行くうちに、早やけふも暮れる。野尻の宿へつくまへに駒が嶽にうつる美しひ夕照を見た。この夕照の色は純粹な紫で、木曾通な奇應丸の說には駒が嶽にある紅葉へうつる夕日の色が、遠くあの美しい彩を見せる

のであらうと言つた。ことにあたりの高山が皆な暗黯として
ゐるなかに、獨り駒が嶽が桔梗の花の色のやうで、どこやら
透明な光を帶んで、靜かな空にかゞやいてゐるさまは、殆ん
ど畫かと思はれた。いつぞや箱根の湖水にうつる富士を見た
ことがある。それがやはりこの紫であつた。自然の色のうち
でも、黄とか緑とか言ふ色は、到るところに見られる。生粹
な紫の色は自然の惜んで藏してあるものだ、容易には人間の
目に觸れない。

こよひの宿は野尻の旅人宿の奥の二間で、姉と姪とは自分等
を待つてゐた。こよひほど氣がねもなく、遠慮もなく、一つ
の炬燵を四方から取圍んで、樂しい話をしたことはなかつた。
「お風呂が湧きましたからお流しになりませんか」とのことで、
かはる〴〵出ていつたあと、自分は炬燵に頭をつけて、けふ

の自然のさまを心のうちに浮べてみた。假名千谷のあけぼの、
羅天の夕ぐれ、自分に自然を寫すの筆があつたなら、この日
記もかうした無趣味なものではあるまい。世間に美ましいと
思ふことも多いなかに、自然の趣を捕へてそのまことの姿を
寫す美術家の力ほど羨ましく慕はしいものはあるまい。文に
も詩にもそれ〴〵の流義があるやうに、自然にもまた流義が
ある。狹いと思へば廣く、淺いと思へば深く、靜かなと思へ
ば動いてゐる、うつろふと見ればとゞまつてゐる。あゝこの
無盡藏な自然を寫すことが出來やうか、美術家の自然を寫す
のは、たとへば手をのばして泉を掬ぶやうなものであろう、
口元までもつてくるうちに、七分通は指の間から泄らして去
まう。

十一月四日

ゆふべは些細な輿に乗つて思はず理に落ちた。けさ八時ごろに姉と姪とは車を雇つて先へ出掛けた。

九段が淵を過ぎ、小野の瀧を見て、滑川橋を渡るころは時雨になるかと思はた空合も、晴れて寢覺へついた。寢覺は浦島の古事をかりて、岩のほとりのながめ深く靜かなところに、浦島の釣を垂れたといふ床もある。臨川寺の辨天堂には浦島の釣竿といふのがある。そのほとりに姿見の池もあつて、奇を好む旅人の必ず立寄る名所となつてゐる。この寺の門前に一人の僧が聲を擧げて、手には帳面を持ち、筆をくわえて、いそがしく罵りさわいでいると、五六人の百姓が汗を流して米俵を持ち運んでゐた。門を入つて案内を賴むと、にしめた

やうな衣を着て、おもさじもうつくしく、十歳ばかりと思はれるのが干柿を釣るしてゐたが、年上なのに叱れて、ふぶしぶ自分等の案内をしてくれた。この龍宮の入口にも秋は暮れて、垣根に殘つてゐる黄菊の花もあはれであつた。

上松あたりから木曾川には白の花崗岩と薄黑い安山岩とがいれまざつて、河を上れば上るほど花崗岩はすくなくなる。この邊に多い皂莢樹の蔭に腰かけて、通る人を眺めながら笑つてゐる糸ひきの工女もあつた。夏は河鹿なくといふ流れのほとり、馬士が勇ましく歌をうたつてくるのもあつた。

假名千谷の趣も、羅天の眺めも、その風情を合せて變化を盡してゐるのは棧橋であらう。丁度道路の修繪で石を割る音がおそろしく響き渡つて、そのために休茶屋までがとりこわしてあつた。五六人の工夫が落葉をくべて、火をたいてゐるほ

とりや。大な割石の間をぬけて、小高いところから見下すと日の光がこのさびしい谿谷にさしてらして、木曾川のほとりは皆な紅葉であつた。自分等は紅葉の影の深いところへ入つたり、また日の光の花やかにさすところへ出て、影にかくれ光を浴び、自然の色彩の美はしいのに眼もまばゆいほどであつた。

思はず自分等は時を費してゐたが、これからぼつ〳〵と歩いて、福島の奇應丸の家まで着くには餘程みちのりがあるやうに思はれた。合士（かうし）といふところで、木曾王瀧の二つの川の流れ合ふさまを見て、夕暮の空にかゞやく明星にさそはれて福島へ入つた。

一葉舟畢

明治三十一年六月十二日印刷
明治三十一年六月十五日發行

一葉舟奥付
實價金三拾五錢

著者　島崎春樹
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田篤太郎
東京市京橋區築地三丁目十五番地

印刷者　根岸高光
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所　春陽堂
（電話本局五十一番）
東京市京橋區築地三丁目十五番地

印刷所　帝國印刷株式會社
（電話浪花千〇七十九番）

版權所有

●内に發行者の印章を捺印●
●なき者は偽●